

日本語学論説資料  
第五〇号(平成二十五年分)

収録論文一覧

第一分冊(国語学一般・国語史)

一 国語学一般

岩手大学人文社会科学部紀要 アルテス リベラレス 八九(一一・一二)	日本語と日本文化のモノロギ的性格について	斎藤 伸治	1
桜花学園大学人文学部研究紀要 CD ROM版 一四(一二・一三)	明治時代における公用文リテラシーの形成	鹿島 美千代	9
大阪府立大学 言語文化学研究 言語情 報編 七(一二・一三)	言葉の「乱れ」をめぐる新聞記事の分析 —「ことば」に関する新聞記事見出しデータベース から—	増田 祥子	14
学習院女子大学紀要 一五(一三・一三)	日本語の歴史的研究における「視座の転換」の可 能性	福島 直恭	22
高知大学留学生教育 七(一三・一三)	変わりゆく日本語、変わらない日本語	平田 オリザ	29
国文学言語と文芸の会 国文学言語と文 芸 二二八(一二・一三)	見えないものを見た人たち —日本語史・日本語 研究をふりかえって 付 表章先生の遺著につい て—	小池 清治	—
国立歴史民俗博物館研究報告 日本にお ける民俗研究の形成と発展に関する基礎 研究 一六五(一一・一二)	揮啓 新村出様 柳田国男書簡からみる民俗学史 断章	菊地 暁	一五
全国大学国語国文学会 文学・語学 二〇三(一二・一七)	近代語現代語研究の動向	半藤 英明	三一
全国大学国語国文学会 文学・語学 二〇六(一二・一七)	古典語研究の発展を期待して	山田 昌裕	三四
全国大学国語国文学会 文学・語学 二〇六(一二・一七)	「国語」という概念と「国語学(日本語学)と言語学と の接点」	柿木 重宜	三六
専修大学学会 専修人文論集 九〇 (一二・一三)	市区町村広報紙の副詞と用字	斎藤 達哉	43
中京大学文学部紀要 四七一 (一二・一〇)	中世以降の古記録の日本語学的研究 序説	後藤 英次	三八
東京大学国語国文学会 国語と国文学 八九六(一一・一〇)	排除と包摂 —国学・国文学・芳賀矢一—	品田 悦一	四九
東京外国語大学国際日本研究センター 日本語・日本学研究 二(一二・一三)	「言葉普及徹底ニ関スル件」大島郡教育会につ いて	前田 達朗	56
日中言語研究と日本語教育研究会 日中 言語研究と日本語教育 六(一二・一〇)	国語学者三尾砂と日本語教育文法 —『が』と 『は』・動詞活用形・形容詞等を中心に—	姫野 昌子	61
日本通訳翻訳学会 通訳翻訳研究 一三 (一二・一一)	わが国における手話通訳者養成事業の実態と課題	霍間 郁実 四日市 章	68

日本のローマ字社 659 (一一・一)	Rōmazi no Nippon	ローマ字は日本語普及の救世主	Takatori Yuki	77
日本のローマ字社 660 (一一・四)	Rōmazi no Nippon	宣教師ロプシャイトが見た日本と日本語	Tenyama Naoko	80
日本のローマ字社 660 (一一・四)	Rōmazi no Nippon	看護師・介護福祉士と日本語 — EPAに漢字の壁 半数以上が帰国	Rōmazi no Nippon 編集部	85
日本のローマ字社 661 (一一・七)	Rōmazi no Nippon	通訳としてのロプシャイト	Tenyama Naoko	90
日本のローマ字社 661 (一一・七)	Rōmazi no Nippon	日本式ローマ字運動の旗をかかげて インターネット「ローマ字ネットの会」がスタート	Shimizu Masayuki	94
日本のローマ字社 662 (一一・一〇)	Rōmazi no Nippon	漢字にたよらない日本語へ	Nomura Masaki	96
日本のローマ字社 664 (一一・四)	Rōmazi no Nippon	戦後の単独国語ローマ字教科書について — 公益財団法人教科書研究センター所蔵による —	茅島 篤	101
日本のローマ字社 664 (一一・四)	Rōmazi no Nippon	日本語改革運動の資料「一〇」「理學協會雑誌を羅馬字にて發兌するの發議及び羅馬字用法意見」常用漢字表の改定がもつ意味	竹端 瞭一 ／解説	110
一橋大学語学研究室 言語文化 (一一・一一)	四九		三枝 令子	113
北海道文教大学論集 一四 (一一・三)		改定常用漢字の高等学校国語科における教育に関する考察 — 二〇一二(平成三三)年度の北海道を中心に —	矢部 玲子	120
三重大学教育学部研究紀要 六四 (一一・一〇)		「学年別漢字配当表」の字種をめぐって — 櫻「一尺」 —	丹保 健一	127
宮城学院女子大学キリスト教文化研究所 沖繩研究ノート 二二 (一一・三)		服部四郎の来沖 — 『服部四郎 沖繩調査日記』を読む —	今林 直樹	134
立命館大学文学部人文学会 立命館文學 六二九 (一一・二)		愛郷心教育の実践についての考察 — 日本の地域言語政策の視点から —	原田 茜	142
早稲田大学大学院文学研究科紀要 第一分冊 五七 (一一・二)		ことばをめぐる問題の解決に向けた言語意識教育の可能性と課題 — 言語的不公正の視点から —	黒川 悠輔	164
二 国語史				
愛知大学国文学 五一 (一一・一)		芝原春房問本居宣長答『萬葉集疑問』(二)	片山 武	五八
愛知大学文学論叢 一四六 (一一・二七)		啓蒙思想と『国語辞典』(その三)	早川 勇	170
青山学院大学日本文学会 青山語文 四三 (一一・三)		『三才絵詞』東大寺切とその本文(五)	安田 尚道	六三
アクセント史資料研究会 論集 八 (一一・一一)		近世古今伝授資料における声点と胡麻章	坂本 清恵	六四
アクセント史資料研究会 論集 八 (一一・一一)		『名目抄』所載の漢字一字四拍の漢語に差された声点について	上野 和昭	七二
アクセント史資料研究会 論集 八 (一一・一一)		平声軽点の消滅過程について — 六声体系から四声体系への移行 —	鈴木 豊	181
アクセント史資料研究会 論集 八 (一一・一一)		中世和化漢文資料に現れる漢語声点の揺れ — 『新猿楽記』弘安本・康永本・古抄本の比較から —	加藤 大鶴	192
アクセント史資料研究会 論集 九 (一一・一一)		後期咄本資料として見た三笑亭可楽の作品 — 『新作おとしはなし』を中心に —	三原 裕子	202

茨城大学人文学部紀要 人文コミュニケーション — ション学科論集— 四 (一三三)	アーネスト・サトウ『会話篇』Part II 訳注稿(補遺)	櫻井 豪人	214
大阪大学国語国文学会 語文 九九 (二二二)	國立臺灣大學圖書館藏威爾本『日本書紀』調査に 関する覚書	是澤 範三	八三
大阪大学国語国文学会 語文 一〇〇・ 一〇一 (一三二・一三三)	文法化と認知的視点	玉村 禎郎	八八
大阪大谷大学日本語日本文学会 大阪大 谷国文 四三 (一三三)	訓点から見た坂東本『教行信証』の側面	宇都宮 啓吾	九四
大阪府立大学 言語文化科学研究 日本語 日本文学編 七 (二二二)	大槻以後 — 学校国文法成立史研究—	山東 功	223
大妻女子大学草稿・テキスト研究所 研 究所年報 五 (二二二)	一九世紀日本ミッシュンにおける日本語研究資料 の草稿について	木村 一	233
学習院大学人文科学研究所 人文 一〇 (二二二)	東アジア言語(日本語・中国語・朝鮮語)の南北方 言の音韻対応から推定された紀元前約一万年前の 「呼吸量変化」(口腔鼻腔流出量比率変化)とその要 因について	あべ せいや	255
川村学園女子大学研究紀要 二四一 (二二二)	式亭三馬所蔵『まこと草』に関して — 『片言』との比較を通して—	長崎 靖子	267
九州大学国語国文学会 語文研究 一一三 (二二二)	九州大学文学部蔵本『(代)ぎ十二通切紙』の連声 について	蛭沼 芽衣	275
京都大学文学部国語国文学研究室 国 語国文 八一三 (二二二)	『尚書聴塵』における新注撰取の様相	田中 志瑞子	二〇三
京都大学文学部国語国文学研究室 国 語国文 八一三 (二二二)	清原宣賢抄本と『燈前夜話』— 手控本生成の一 端と講釈における利用をめぐる—	野上 潤一	二二
京都大学文学部国語国文学研究室 国 語国文 八一三 (二二二)	『日葡辞書』の開拓長音	竹村 明日香	283
京都大学文学部国語国文学研究室 国 語国文 八一三 (二二二)	上代特殊仮名遣と母音調和	木田 章義	二〇〇
京都大学文学部国語国文学研究室 国 語国文 八一三 (二二二)	『新撰字鏡』序文と『法琳別伝』	大槻 信一	二二三
京都外国語大学研究論叢 七八 (二二二)	『新撰字鏡』序文と『法琳別伝』	小槻 真衣	二二二
京都外国語大学研究論叢 七九 (二二二)	『新撰字鏡』序文と『法琳別伝』	森下 真衣	二二二
京都外国語大学・京都外国語短期大学研 究論叢 八〇 (二二二)	『新撰字鏡』序文と『法琳別伝』	大槻 信一	二二三
京都外国語大学・京都外国語短期大学研 究論叢 八一 (二二二)	『新撰字鏡』序文と『法琳別伝』	小槻 真衣	二二二
京都産業大学論集 人文科学系列 四六 (二二二)	『新撰字鏡』序文と『法琳別伝』	森下 真衣	二二二
京都女子大学国文学会 女子大國文 一五一 (二二二)	『新撰字鏡』序文と『法琳別伝』	大槻 信一	二二三
京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 国文論叢 一二 (二二二)	『新撰字鏡』序文と『法琳別伝』	小槻 真衣	二二二



大正大学国文学会 国文学踏査 二四 (二・三)	近現代国語辞典の軌跡	倉島節尚 二七五
千葉大学文学部日本文化学会 語文論叢 二七 (二・二七)	『潮来婦志』の資料性	岡田一祐 二八五
中部大学 人文学部研究論集 一九 (二・三・一)	先史アジア語とその残影(5)	近藤健二 475
中部大学 人文学部研究論集 三〇 (二・三・七)	先史アジア語とその残影(6)	近藤健二 495
鶴見大学紀要 第一部 日本語・日本文 学編 四九 (二・三)	西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏 ―異本注記の有無について―(五)	小林恭治 二九三
鶴見大学紀要 第一部 日本語・日本文 学編 五〇 (二・三・三)	西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏 ―異本注記の有無について―(七)	小林恭治 三〇三
帝塚山学院大学研究論集 リベラルアー ツ学部 四八 (二・三・二)	ケリ読み添え箇所訓法一致率による法華経諸本 の分類	加藤浩司 三二五

(第一分冊増刊に続く)

\* …… 論説資料のページ数の制約により、掲載できなかった長大な論文

第一分冊増刊(国語史・文字・表記)

一 国語史(承前)

東海学園大学日本文化学会 東海学園 言語・文学・文化 二二(二三三)	校本詩学大成抄(一)	小松林幸夫 島尾肇子 絵莉香	一
東京大学言語学論集 三二(二二九)	『英和对訳袖珍辞書』の構成法の考察	三好 彰	1
東京大学言語学論集 三四(二三九)	『語厄利亜語林大成』と『英和对訳袖珍辞書』に 見る黎明半世紀の英字の進展	三好 彰	10
東京学芸大学国語国文学会 学芸国語国 文学 四五(二三二)	言語変化の段階と要因	小柳 智一	18
東京都立大学国語国文学会 都大論究 五〇(二三六)	日本語史における「現代語」とは何か —日本語史の時代区分についての一提言—	浅川 哲也	二〇
同志社女子大学日本語日本文学 二五 (二三〇)	『和漢朗詠集』十段抄本の注記札記について —専修大学本・天理図書館本を中心に—	稲垣 信子	二六
同志社女子大学大学院文学研究科紀要 二三(二三三)	玫瑰誌 —西洋文化の表象としての—	吉野 政治	三三
南山大学日本文化学科論集 一三 (二三〇)	Essence of Rodrigues' grammatical view of the Japanese language —Representative extracts from the <i>Arie Breve</i> and the <i>Arie Grande</i> by Father João Rodrigues, with explanatory annotations and interpretations—[1]	Toru MARUYAMA J.Patrick BARRON	24
新潟大学 人文科学研究 一三二 (二二二)	平曲の声・息継ぎの伝授	鈴木 孝庸	四四
二松学舎大学日本漢文教育研究プログラ ム 日本漢文学研究 七(二二三)	清原宣賢『大学聴塵』字音注	佐藤 進	五七
日本のローマ字社 <i>Rōmazi no Nippon</i> 659(二二二)	南部義壽と大庭雪斎 —『譯和蘭文語』を中心と して—	Simizu- Masayuki	32
比治山大学現代文化学部紀要 一九 (二三二)	平家物語における「ほころ」と「おこる」 —覚一本・延慶本を中心に—	土居 裕美子	六四
弘前大学教育学部紀要 一〇七(二二三)	酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料 —目的と出 版地からの分類分析—	郡 千寿子	37
弘前大学教育学部紀要 一〇七(二二三)	高山寺本『莊子』の漢字音	石山 裕慈	40
弘前学院大学文学部紀要 四九 (二三二)	副詞の歴史的的研究における課題と可能性	川瀬 卓	44
広島大学大学院 論叢 国語教育学 復 刊三(二二七)	「月ヶ瀬本仮名書き法華経」解説並びに翻字(三)	野澤 勝夫	七〇
佛敎大学 仏敎学部論集 九七 (二三二)	清原宣賢自筆『日本書紀抄』(後抄本)の漢字音 —本文と注釈との比較から—	坂水 貴司	七七
文献探究の会 文献探究 五〇 (二二二)	『漢字三音考』—本居宣長の言語観—	田山 令史	八二
北海道敎育大学札幌校国語学第二研究室 イソップ資料 三(二三三)	異言語接触と日本語文法史	青木 博史	54
北海道敎育大学札幌校国語学第二研究室 イソップ資料 三(二三三)	幕末、明治初期の新聞に掲載されたイソップ寓話 —『万国新聞(紙)』『中外新聞』『遠近新聞』—	吉見 孝夫	62
北海道敎育大学札幌校国語学第二研究室 イソップ資料 三(二三三)	改訂版・ロドリゲス『日本大文典』中のイソップ 寓話からの引用 —『エンボのハブラス』『伊曾保 物語』との対比—	吉見 孝夫 他三名	82

万葉学会 万葉 二二四 (一三三)	被覆形による複合・派生の再考察 — 形容詞被覆形の想定 —	蜂 矢 真 弓 九〇
三重大学人文学部文化学科学部研究紀要 人文論叢 二九 (二二二)	コリヤード『羅西日辞書』諸本の異同 — ローマ、ヴァチカンにおける調査を中心に —	川 口 敦 子 91
三重大学 日本語学文学 一四 (三二)	コリヤード『羅西日辞書』諸本の異同(二) — 国内諸本など —	川 口 敦 子 95
武蔵大学人文学会雑誌 四四-四 (三三)	洒落本における会話のストラテジー — 山東京伝『傾城買四十八手』を資料にして —	小 川 栄 一 100
明治学院大学言語文化研究所 言語文化 二九 (二二三)	ヘボン塾と明治の讚美歌	手 代 木 俊 一 九九
山梨大学教育人間科学部紀要 CD-R OM版 一三 (二二)	契沖における仮名遣論の展開 — 『萬葉代匠記』から『和字正濫鈔』へ —	長 谷 川 千 秋 一〇七
立教大学日本文学 一〇九 (二三)	賀茂真淵自筆草稿『西かへり』の解題と翻刻	高 松 亮 太 一三三
立命館大学日本文学大会 論究日本文学 九八 (三三五)	越境者たちの方言誌 — その日本語史への寄与 —	彦 坂 佳 宣 一三九
立命館大学文学部人文学会 立命館文学 六三〇 (三三三)	近世中頃の中国地方山間部における尊敬語辞類 — 『石見方言茶話』の模様と日本語史における位置 —	彦 坂 佳 宣 115
早稲田大学国文学会 国文学研究 一七〇 (三三六)	明治期の漢語理解	今 野 真 二 一三九

## 二 文字・表記

愛知県立大学 説林 六一 (三三)	漢字で日本語の物語をつづるための技術 — 太安萬侶たちの工夫 —	犬 飼 隆 一三四
アクセント史資料研究会 論集 八 (二二)	仮名の呼称 — 現代の『を』の場合 —	佐 藤 栄 作 120
アクセント史資料研究会 論集 九 (三二)	字体とその示し方	佐 藤 栄 作 128
大阪大学国語国文学会 語文 九九 (二二)	D・コリヤード著『さんげろく』の“々々”	山 田 昇 平 136
大阪大学大学院文学研究科 待兼山論叢 四七 文学篇 (三二)	人物呼称の表記の考察 — 村上春樹とその翻訳作品を中心に —	越 野 優 子 144
大阪市立大学国語国文学研究室文学史研究会 文学史研究 五二 (二二)	二合仮名の定位	尾 山 慎 一四二
お茶の水女子大学国語国文学会 国文 一八 (二二)	『安患薬鍋』における振り仮名の研究	石 井 久 美 子 一四九
学習院大学文学部研究年報 五七 (二二)	中国戦国時期青銅器銘文の史料化に関する一試論 — 三晋紀年銅器銘文の字形分析を中心に —	下 田 誠 一五四
九州産業大学国際文化学部紀要 五五 (三二)	伝錦小路本『古文孝経』隸定古文並異体字疏証(三) — 字形からみた鈔写の伝承性の検討 —	石 川 泰 成 一七三
京都大学文学部国語学国文学研究室 国語国文 八十四 (三二)	擬定家本の定家仮名づかい — 親本(資経本)から改訂された表記 —	遠 藤 邦 基 一八四
京都外国語大学研究論叢 七九 (二二)	続・汝の名はかくして変わる — 「表意」の神話、「表言」の虚構	朱 一 星 152
京都女子大学国文学会 女子大国文 一五二 (三二)	播磨極楽寺出土瓦経の篋書き文字 — 筆順と文字の理解度・習熟度 —	西 崎 亨 一九三
杏林大学外国語学部紀要 一五 (三二)	同字異訓	玉 村 禎 郎 159

熊本大学文学部国語国文学会 国語国文学研究 四八 (二二・二)	『万葉集』における無表記形態の諸要因について	藤本 憲信	二〇四
久留米大学文学部紀要 情報社会学科編 七 (二二・三)	外国人著者名の典拠データについて	遠山 潤	170
群馬県立女子大学国文学研究 三三 (二二・四)	上代木簡に見る地名表記法の変遷	北川 和秀	二二二
國學院大學 國學院雑誌 一一二 (二二・一)	『古事記』における熟字の選択 — 単漢字との関係を中心に —	奥田 俊博	二二五
國學院大學 國學院雑誌 一一三 (二二・二)	臣、連、伴造・國造の文字選定をめぐって — その豫備的考察 —	嵐 義人	二二七
國學院大學 國學院雑誌 一一四 (二二・三)	日本語の表記における「仮名遣い」	今野 真二	二二三
國學院大學 國學院雑誌 一一四 (二二・四)	まだまだあるある日本語文の表記法 — 和漢混雑文成立の周辺 —	三角 洋一	二四〇
国文学言語と文芸の会 国文学言語と文芸 一一八 (二二・二)	万葉集は大伴家持が編纂した(Ⅲ) — 作歌の表記時期と短歌の階段 —	中村 昭	二四七
国立国語研究所論集 六 (三二・一)	米国議会図書館蔵『源氏物語』について — 書誌と表記の特徴 —	高田 智和	二六三
駒澤大學 駒澤國文 四九 (二二・二)	俳諧作品における西鶴の用字	斎藤 達哉	二六三
静岡県立大学短期大学部言語文化学会 言語文化研究 一一 (三二・三)	『尋常小学読本』の仮名遣い	伴野 英一	二七五
実践国文学会 実践国文学 八二 (二二・一〇)	日本語学の研究を英語論文の参考文献欄に書く場合その二 — 名前の書き方と四つ仮名 —	中野 真樹	181
上代文学会 上代文学 一一一 (三二・一一)	地名二字表記化をめぐって	福嶋 健伸	186
上智大学国文学科紀要 二九 (二二・三)	記紀歌謡の原表記	北川 和秀	二八二
上智大学国文学会 国文学論集 四六 (二二・一)	コリヤード『懺悔録』の表記的特質 — イエズス会資料との差異 —	瀬間 正之	二九〇
信州大学人文学部 人文科学論集 コミュニケーション学科編 四六 (二二・四)	キリシタン版の原語にみる仮名用字法の意識 — 活字本と写本の比較から —	岩澤 克	三〇二
信州大学人文学部 人文科学論集 コミュニケーション学科編 四七 (二二・四)	書記用語「万葉仮名」をめぐって	白井 純	189
清泉女子大学紀要 六〇 (二二・二)	作り物語における片仮名の和歌 — 「虫愛つる姫君」を中心に —	山田 健三	194
全国大学国語国文学会 文学・語学 二〇一 (二二・三)	森田草平『輪廻』伏字表記考 — 戦前期検閲作品の差別用語問題 —	今野 真二	三二二
専修大学学会 専修人文論集 九〇 (二二・三)	新聞折込広告のキャッチコピーにおける句読点使用について — 都内二地点の新築分譲マンション広告の比較から —	藤井 由紀子	三三二
中京大学文学会 中京国文学 三二 (二二・四)	明朝体と手書き文字の差	牧 義之	三三〇
朝鮮学会 朝鮮学報 二二二 (二二・三)	一八世紀日本の韓国語学習書における「ツ」の表記 — 雨森芳洲の『全一道人』を中心として —	宮 寄 由美	202
東海学園大学日本文化学会 東海学園言語・文学・文化 一一 (二二・二)	『女庭訓往来』と『頭書絵抄』和漢女礼式 女庭訓御所文庫』 — 漢字使用状態から —	研山 勇人	三三五
東京大学言語学論集 三四 (三二・九)	Newly-Discovered Okinawan Sitchima Tally Sticks Containing Pictographs	李 在 鏞	210
		三宅 ちぐさ	218
		Mark ROSA	223



東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要 Language, Information, Text 19 (二二・一一)	字体選好の地域差に関する計量的研究	横山 詔一	228
東京学芸大学紀要 人文社会科学系一六三 (二二・一一)	「当て字」の現代用法について	白 勢 彩子	235
東京学芸大学紀要 人文社会科学系一六四 (二二・一一)	真福寺資料に見られる漢字の通用現象について 其の一	高 橋 久子	二三九
東京学芸大学国語国文学会 学芸国語国文学 四五 (二二・三)	古記録から見た中国と日本の漢字通用現象	于 文 秀	二三九
東京国際大学論叢 人間社会学部編 一七 (二二・九)	和語・漢語がカタカナがきされるばあい	花 田 康 紀	238
東京女子大学日本文学 一〇九 (二二・一七)	漢字用法の史的 research — 仮名書状を視点として —	高 橋 美 咲	二三八
同志社大学国文学会 同志社国文学 七八 (二二・三)	万葉集における仮名と漢字	石 井 久 雄	244
徳島文理大学 比較文化研究所年報 二九 (二二・三)	「著」と「着」の区別について — 兪節用集を中 心として —	青 木 毅	二三三
奈良女子大学日本アジア言語文化学会 叙説 三八 (二二・三)	田辺福麻呂歌集歌の用字と表現	奥 村 和 美	三六〇
奈良女子大学日本アジア言語文化学会 叙説 四〇 (二二・三)	使用頻度からみた十卷本『歌合』の用字法	長 谷 川 千 秋	三六八
奈良女子大学日本アジア言語文化学会 叙説 四〇 (二二・三)	一六二七年の殉教報告書の写本二種に見えるローマ字表記	川 口 敦 子	三七六
日本語学研究所と資料の会 日本語学研究と資料 二六 (二二・三)	万葉仮名字母の使用に影響を与える表記環境	澤 崎 文	三八三
日本大学大学院国文学専攻論集 一〇 (二二・九)	後鳥羽院筆「熊野懐紙」の字母について	吉 田 智 美	三九〇
日本読書学会 読書科学 五四・三・四 (二二・七)	ひらがな文字の形態的類似性評定調査	川 上 弘 正 浩	251
日本のローマ字社 Rômazi no Nippon 659 (二二・一)	「日本語海外普及に関する協議会 (一九三七—一九三八年) の議論に現れたローマ字論	Maeda Hitosi	255
日本のローマ字社 Rômazi no Nippon 659 (二二・一)	Nippongo to Kanzi (Sono 5) 法語は摩訶不可思議《ほうい》は まかごんぎ》	Takeba Ryôiti	259
日本のローマ字社 Rômazi no Nippon 660 (二二・四)	Nippongo to Kanzi (Sono 6) 《平安時代の漢語文化》	Takeba Ryôiti	262
日本のローマ字社 Rômazi no Nippon 661 (二二・七)	Nippongo to Kanzi (Sono 7) 《平安時代の漢語文化》	Takeba Ryôiti	265
日本のローマ字社 Rômazi no Nippon 662 (二二・一〇)	のかなへ《貫之・道風・佐理・行成》	茅 島 薫	268
日本のローマ字社 Rômazi no Nippon 662 (二二・一〇)	日本の語の将来とローマ字	Takeba Ryôiti	271
日本のローマ字社 Rômazi no Nippon 663 (二二・一)	Nippongo to Kanzi (Sono 8) 《平安の草のかな》	Takeba Ryôiti	271
日本のローマ字社 Rômazi no Nippon 663 (二二・一)	資(由)料 福沢諭吉編『文字之教』一八七三年	Takeba Ryôiti	274
日本のローマ字社 Rômazi no Nippon 663 (二二・一)	音韻論とローマ字(一) 第一回 音韻論ができ るまで	Simizu-Masayuki	279
日本のローマ字社 Rômazi no Nippon 663 (二二・一)	Nippongo to Kanzi (Sono 9) 《和漢混清文の發達》	Takeba Ryôiti	285
日本のローマ字社 Rômazi no Nippon 664 (二二・四)	奈良文化財研究所編『日本古代木簡字典』から見た漢字	Iwabuchi Tadasu	287

日本のローマ字社 Rômazî no Nippon 664 (一三・四)	音韻論とローマ字(つくり) — 一字一音素の原理	Simizu-Masayuki	291
日本のローマ字社 Rômazî no Nippon 665 (一三・一〇)	世にいわれる「正しい書き順」	岩淵 匡	297
日本文芸研究会 文芸研究—文芸・言語・思想— 一七五 (一一・三)	近代教育漢字字体資料の分類	山下 真里	300
広島大学教育学部国語教育会 国語教育研究 五三 (一一・一)	龍谷大学蔵『黒谷上人語燈録』(〇二—一三四—一七)における疊字(つづ)つ	瀬古 淳祐	四〇一
広島大学大学院 論叢 国語教育学 復刊四 (一一・五)	御物本『更級日記』の仮名字体について	佐々木 勇	四〇六
広島文教女子大学国文学会 文教国文学 五七 (一一・一)	東京大学史料編纂所本『加州官地論』について—表記から見た諸本の関係性—	橋村 勝明	四〇九
福岡教育大学紀要 第一分冊 文科編 六一 (一一・一)	『絵入源氏』三種類の字母 —「桐壺」巻から—	沼尻 利通	四一五
福岡教育大学国語科研究論集 五四 (一一・一)	『絵入源氏』三種類の本文表記 —「桐壺」巻から—	沼尻 利通	四二二
北海学園大学学術研究会 学園論集 一五三 (一一・九)	Rômazî Nihongo-bun no <i>ti</i> to <i>tu</i> no <i>ôzuri-kata</i>	KIRIKAE Hideo	307
北海道大学国語国文学会 国語国文研究 一四一 (一一・一)	江戸期のいろは仮名	岡田 一祐	四一九
北海道教育大学語学文学会 語学文学 五〇 (一一・三)	万葉集の表記における選字意識	伊藤 一男	四三五
万葉学会 万葉 二二五 (一一・三)	古風土記の地名表記と和銅官命	橋本 雅之	四四〇
明治大学大学院 文学研究論集 三八 (一一・一)	橋本進吉の文字論	シヨーン・ニコルソン	四四七
山形県立米沢女子短期大学国語国文学会 米沢国語国文 四一 (一一・一)	国語教材としての新聞活用事例とその課題(常用漢字表(平成二年内閣告示第一号)と新聞報道をめぐって)	高橋 永行	315
立教大学日本学研究所年報 九 (一一・一)	連歌における(つ)の仮名表記	岡田 薫	329
立教大学日本学研究所年報 一〇・一一 (一一・七)	『仮名文字遣』の促音およびt入声の仮名表記	岡田 薫	四五五
立命館大学 立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要 七 (一一・七)	古今和歌集元永本の周辺における漢字	石井 久雄	339
立命館大学日本文学大会 論究日本文学 九六 (一一・五)	『航米日録』巻一〜巻五の漢字について	浅野 敏彦	350
立命館大学文学部人文学会 立命館文学 六三〇 (一一・三)	『航米日録』の外国地名表記	湯浅 彩央	四六八
立命館大学文学部人文学会 立命館文学 六三三 (一一・一)	日本語の用字用語	児玉 徳美	355
琉球大学法文学部紀要 日本東洋文化論集 一九 (一一・三)	万葉仮名の前と後	上村 幸雄	365
早稲田大学国文学会 国文学研究 一六八 (一一・一〇)	『万葉集』の訓字主体表記に見える二種の仮名—表記環境による字母の違い—	澤崎 文	四七四

\*\*\*… 著作権者と連絡がとれなかったため紹介にとどめた論文

## 第二分冊 (文法)

### 文法

愛知大学語学教育研究室紀要 言語と文化 二八 (一一・三)	物語論における人称の意味 認知的談話構築の観点から	山本 雅子	1
愛知大学国文学 五一 (一一・三)	接続詞「および」の解釈	久野 かおる	10
愛知大学文学論叢 一四六 (一一・七)	古代語・現代語の複合形容詞の比較 — 名詞＋形容詞の複合形容詞の場合 —	漆谷 広樹	17
愛知教育大学国語国文学研究室 国語国文学報 七〇 (一一・三)	『在京日記』における係り結びと連体形終止	高瀬 正一	30
愛知教育大学国語国文学研究室 国語国文学報 七〇 (一一・三)	条件表現史上における原因理由文の変化の意味	矢島 正浩	36
愛知教育大学大学院国語研究 二二 (一一・三)	「語の安定化」と二段活用的一段化	佐々木 淳志	49
愛知県立大学外国語学部 紀要 四五 言語・文学編 (一一・三)	The Intervention Effect as a Syntactic Phenomenon in Japanese	Hisashi MORITA	57
愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会 言語文化 二〇 (一一・三)	日本語主語の復権 — 日本語助辞「は」の機能(二) —	山内 啓介	74
愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会 言語文化 二〇 (一一・三)	源氏物語「若菜巻」における格助詞「の」の二用法	三島川 幸治	82
愛知淑徳大学論集 グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇 一 (〇九・三)	日本語助辞「は」の職能	山内 啓介	87
青山学院大学日本文学会 青山語文 四二 (一一・三)	古典語に見られる(名詞句＋副助詞)の格	山田 昌裕	—
青山学院大学日本文学会 青山語文 四二 (一一・三)	アスペクトの情報伝達機能 — 「タ」形と「テイ」形を中心に —	孫 敦夫	六
茨城大学留学生センター紀要 一一 (一一・三)	引用述語の現れない発話・思考報告文 — 「省略」か「構文」か	大島デイヴィン ド義和	95
上田女子短期大学紀要 三五 (一一・一)	Scrambling and the Structure of TP: Remarks on Miyagawa (2001)	Mizuguchi Manabu	103
桜美林大学 桜美林論考 言語文化研究 四 (一一・三)	直接引用形式を前項に持つ複合名詞「〜状態」をめぐって	新屋 映子 東條 和子	108
桜美林大学言語教育研究所 桜美林言語教育論叢 九 (一一・三)	日本語の無主語文をめぐって	新屋 映子	115
桜美林大学大学院言語教育研究科 言語教育研究 三 (一一・三)	範疇横断的研究 — 「固体的範疇」と「液体的範疇」	山岡 洋	122
大分大学 国語の研究 三八 (一一・三)	比況の副詞の位置	中川 祐治	128
大阪大学国語国文学会 語文 九九 (一一・三)	日本語の疑問詞疑問文と「の」の有無	金水 敏	133
大阪大学古代中世文学研究会 詞林 五一 (一一・一〇)	中古・中世における作成動詞・入手動詞 — 受益者の格標示をめぐって —	森 勇太	二三
大阪大学世界言語研究センター論集 七 (一一・三)	全てのヲは格助詞か	中尾 有岐	139
大阪大学日本語日本文化教育センター 日本語・日本文化 三八 (一一・三)	毛能波と氏尔乎	薦 清行	一九

大阪大学日本語日本文化教育センター 日本語・日本文化 三八(二・三)	助詞「に」の統語的性質について — 補文化辞の 観点から —	荘司育子	146
大阪大学大学院文学研究科紀要 五三 (二・三)	非意図的な出来事と「損失構文」 — 使役構文との 相違について —	鄭聖汝	156
大阪大学大学院文学研究科 待兼山論叢 四六 日本学篇 (二・二二)	現代日本語における「人がある」存在文の成立条 件	黒川尚彦 鄭聖汝	165
大阪大学大学院文学研究科 待兼山論叢 四六 文学篇 (二・二二)	An Argument for the Movement Analysis of SHIKA-NPI Licensing in Japanese	Maiko YAMAGUCHI	176
大阪大谷大学日本語日本文学会 大阪大 谷国文 四二(二・三)	「注文の多い料理店」小考 — 「数量詞 + も + 仮定 節」数量詞「だけ」の表現性から —	大槻美智子	188
大阪国際大学 国際研究論叢 二五二 (二・一)	今昔物語集の形容詞の体系性 — 中古資料との比 較を交えて —	村田菜穂子	196
大阪国際大学 国際研究論叢 二六一 (二・一〇)	主部内在型関係節の成立条件についての一考察	伊藤創	203
岡山大学言語国語国文学会 岡大国文論 稿 四〇(二・三)	中世末く近世期口語資料におけるモシ疑問文・推 量文の文型と意味	康雯琪	213
お茶の水女子大学人文科学研究 九 (三・一)	Some Notes on Verbal Reflexives in Japanese	Tohru Noguchi	221
香川大学教育学部研究報告 第一部 二一九(三・三)	続古事談における希望表現について — 古事談と の比較を兼ねて —	連柴田 昭二 連柴田 友二	二七 三〇
香川大学教育学部研究報告 第一部 一四〇(三・九)	江談抄における希望表現について	連柴田 昭二 友二	三〇
学習院大学人文科学研究 人文 一〇 (二・一)	二つの目的語をもつ上代語の構文 — 助詞「を」の 機能 —	佐佐木 隆	三四
学習院大学人文科学研究 二二 (二・一〇)	感情形容詞の副詞的用法について	村上佳恵	229
学習院大学文学部研究年報 五人 (二・一)	時間節および時間句「時」頃」の用法	前田直子	245
神奈川大学言語研究 三四(二・三)	On Some Differences between Restrictive and Nonrestrictive Relative Clauses and the Parallelism between Head-Internal and Head-External Relative Clauses in Japanese	Hiromi Sato	251
関西外国語大学研究論集 九七 (二・一)	「よみかた」「よびに」の交替 — 名詞句「N1のよ うなXなN2」における —	光信仁美	268
神田外語大学言語科学研究センター Scientific Approaches to Language 11 (二・一)	独立文の条件再考	井上和子	277
神田外語大学言語科学研究センター Scientific Approaches to Language 11 (二・一)	状態変化を表す軽動詞「する」: 「AをBにする」 構文の統語分析	山田昌史	286
北九州市立大学文学部紀要 八一 (二・一)	上代語における係助詞カの振る舞い — 係助詞ヤ との比較を通して —	堀尾香代子	297
北九州市立大学文学部紀要 八二 (二・一)	上代語にみるヤによる係り結びの異型	堀尾香代子	305
岐阜大学国語国文学 三九(二・三)	ヲ格と三格のゆらぎ	山田敏弘	310
岐阜大学留学生センター紀要(二・三)	「感情表現十(二)」の周辺(二)	加藤由紀子	315
岐阜聖徳学園大学国語国文学 三二 (二・三)	『教訓近道』の疑問表現 — 『伊曽保物語』との比 較を通して —	濱千代 いづみ	319

九州大学大学院 文学研究 一〇九 (二・三)	機能拡張モデルと言語運用の要請 — 問返し疑問の応答に関する覚書 —	稲田 俊明	325
九州大学大学院 文学研究 一一〇 (二・三)	日本語における自動詞と名詞句の結合違反について — 評定値実験の結果を基に —	坂本 勉	325
京都大学言語学研究 三二 (二・二二)	ニヨッテ受動文についての一考察 — ニ・ニヨッテ受動文の統一的分析に向けて —	Rudy Toet	336
京都大学文学部国語学国文学研究室 国語国文 八一九 (二・二七)	不変化助動詞の本質、統制	大木 一夫	四六
京都大学文学部国語学国文学研究室 国語国文 八二〇 (二・二〇)	ロドリゲス大文典における「同格構成」と「異格構成」(二〇二)	小鹿原 敏夫	351
京都産業大学論集 人文科学系列 四六 (二・三)	日本語の遠近を表す形容詞「近い・遠い」と格助詞「に・から」	平塚 徹	360
京都橋大学研究紀要 三八 (二・二)	命令・意志を表す名詞文についての覚書	中 関 智 崇	369
共立女子大学国際学部 共立国際研究 一九 (二・三)	「といえは」の主題提示用法	佐藤 雄 一	379
共立女子大学国際学部 共立国際研究 三〇 (二・三)	名詞述語文「AはBだ」の種類と使用比率	佐藤 雄 一	389
杏林大学外国語学部紀要 二四 (二・三)	On the Japanese Right Periphery	Daisuke INAGAKI	398
熊本大学文学部国語国文学会 国語国文学研究 四七 (二・二)	いわゆる「気づきの『けり』」再考 — その諸相、および他の語用法の中での位置づけをめぐって —	坂 田 一 浩	五五
熊本県立大学大学院文学研究科論集 五 (二・九)	命令文の基本的機能	佐藤 友 哉	六三
群馬大学語文学会 語学と文学 四八 (二・三)	並立助詞と共にするナンズ・ナズ	小 林 正 行	四四
慶應義塾大学言語文化研究所紀要 四四 (二・三)	Indirect Passives and Relational Nouns (II)	Takashi Iida	四九
言語と交流研究会 言語と交流 一六 (二・七)	生理的境界点・閾値と局面変化完了認知基「タ」の関係	関 口 美 緒	四三
甲南大学紀要 文学編 一六三 (二・三)	事象キャンセル可能性についての質問紙調査 — その詳細データ —	青 木 奈 律 乃 中 谷 健 太 郎	四三
甲南女子大学国文学会 甲南国文 六〇 (二・三)	「源氏物語」での「けるかな」の用例の検討 — 「詠嘆」の表現を考える一助として —	西 田 隆 政	四七
神戸大学大学院 神戸言語学論叢 八 (二・三)	THE GENESIS OF THE JAPANESE GRAMMATICAL MARKER <i>ni</i>	Hideki Kishimoto	四二
神戸市外国語大学研究会 神戸外大論叢 六三・一 (二・三)	現代日本語の主題に現れうる名詞句についての覚書	福 田 嘉 一 郎	四二
神戸市外国語大学研究科論集 二六 (二・七)	「ラレテイル」の文の動作主不表示 — 「ラレテイル」のアスペクト的意味と動作主の指示特性からの分析 —	李 藝	四二
神戸松蔭女子学院大学 Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin (TALKS) 16 (二・三)	現代法令におけるサ変動詞五段化・上一段化現象の言語内的要因	松 田 謙 次 郎	四二
神戸女子大学国文学会 神女大国文 二四 (二・三)	動詞の否定中止形ナクの使用状況と成立背景	舩 木 礼 子 (橋 本 礼 子)	四二
神戸山手大学紀要 一四 (二・二)	日本語の補足節と代用形 — 引用節とその周辺 —	阿 部 忍	四二
國學院大學 國學院雜誌 一一四・一六 (二・二)	源氏物語における敬語「御」の用法	高 桑 恵 子	七一

國學院大學 國學院雜誌 一一四—二二 (二二・一一)	日本国憲法の「は」と、その構文	中村幸弘	七七
國學院大學日本語教育研究 三 (二二・一〇)	「受身動詞」と「使役動詞」の定義について	岡田誠	493
国立国語研究所 国語プロジェクトレ ビュー 四一—(二二・一〇)	複文構文プロジェクトにおけるいくつかの話題	益岡隆志	498
国立国語研究所論集 四 (二二・一一)	節連接マーカーにおける動詞の活用形とモダリティ	角田三枝	502
埼玉大学紀要 教養学部 四八—二 (二二・一〇)	現代日本語の動詞「詰める」覆いの分析 — 格体制の交替の観点から —	川野靖子	517
埼玉大学紀要 教養学部 四八—二 (二二・一〇)	The Resolution of Ambiguities in Coordinate Noun Phrase Structures in Japanese: a corpus-based study	Nobuhiko YAMANAKA	523
四国大学紀要 A 人文・社会科学編 B 自然科学編 A 三七・B 三四 (二二・一一)	大宰治『晩年』の副助詞バカリとダケ — 堀辰雄 二作品との対比を兼ねて —	田中敏生	八三
四国大学紀要 A 人文・社会科学編 B 自然科学編 A 三八・B 三五 (二二・一一)	『古今和歌集』の副助詞ダニ — (相対的軽少性) の意義をめぐって —	田中敏生	九五
四国大学紀要 A 人文・社会科学編 B 自然科学編 A 三九・B 三六 (二二・一一)	『後撰和歌集』の副助詞サへ — 平安朝和歌にお ける(周縁波及性)の意義の一確認 —	田中敏生	一〇二
島根大学 島大言語文化 三三— (二二・一〇)	MODALITY AND A CASE MARKING CONSTRAINT IN JAPANESE POTENTIAL CONSTRUCTIONS	Akiho KOBAYASHI	542
下関市立大学論集 五七一 (二二・一五)	有対の自・他動詞の意味制約(上) — 受け身、使 役、可能、自発との関わり —	中野琴代	559
首都大学東京・東京都立大学 人文学報 四六—二 (二二・一一)	「連体修飾節と主節の時間的關係について」再論 — 石井・石川(二〇一〇)への反論 —	大島資生	564
上智大学国文学会 国文学論集 四五 (二二・一一)	キリシタン資料における助詞ヨリの「主格」用法 について — コンテムツスムンヂを中心に —	小島和	一〇八
上智大学国文学会 国文学論集 四六 (二二・一一)	「属」の分類原理 — 富士谷成章『あゆみ抄』にお けるテニヲハの分類 —	遠藤佳那子	一一八
信州大学国語教育学会 信大国語教育 二二—(二二・一一)	連体修飾表現の接続形式トノとその周辺	登内恭平	572
信州大学人文学部 人文学論集 文化 コミュニケーション学科編 四六 (二二・一〇)	述体に於ける動詞文と形容詞文	石神照雄	二二七
信州大学人文学部 人文学論集 文化 コミュニケーション学科編 四七 (二二・一〇)	述体に於ける名詞文	石神照雄	二三四
信州大学人文社会科学部 研究 五 (二二・一〇)	優位性効果と指示関数	村田明	578
成蹊大学一般研究報告 四七—七 (二二・一一)	副詞句と否定文	井島正博	一四四
成蹊大学 成蹊国文 四五 (二二・一一)	明治期国定『高等小学読本』の可能表現形式	小木曾智信	一五八
成蹊大学大学院 成蹊人文研究 二二 (二二・一一)	数量詞と否定文	井島正博	一七七
清泉女子大学人文学部 研究紀要 三四 (二二・一一)	現代語確立期における「はずだ」の用法推移 — 予定を意味する客観的な「はず」の衰退を中心 として —	松本隆	583
専修大学学生会 専修人文論集 九一 (二二・一一)	複合辞の「ことだ」についての二試論	高橋雄一	590

創価大学日本語日本文学会 文学 一三二 (二・三)	日本語日本 事態の既定性と「せっかく」構文	蓮沼昭子	602
創価大学日本語日本文学会 文学 一三三 (二・三)	「とする」と「にする」の違い——意味・用法を中 心にして——	大塚望	614
園田学園女子大学論文集 四六 (二・一)	テ形節における統語的考察	吉永尚	624
園田学園女子大学論文集 四七 (二・一)	「ナイズ」と「ナクテ」の相違について	吉永尚	630
大東文化大学語学教育研究所 研究論叢 三〇 (三・二)	限定的評価判断の表現——「だけに」「だけあって」 などをめぐって——	田中寛	634
拓殖大学大学院 言語教育研究科研究年 報 一三三 (三・三)	出発点を表す格助詞「を」と「から」について	孫逸珊	645
拓殖大学大学院 言語教育研究科研究年 報 一三三 (三・三)	格助詞「を」の包括的意味用法に関する一考察	盤若洋子	651

(第二分冊増刊に続く)

\*\*\*……著作権者と連絡がとれなかったため紹介にとどめた論文

第二分冊増刊(文法)

文法(承前)

筑紫女学園大学・短期大学部 人間文化 研究所年報 二四 (二・三八)	「NP1のNP2」のカテゴリー分析	緒方 隆文	1
千葉大学文学部日本文化学会 語文論叢 二八 (二・二七)	モダリティに関する覚え書き	岡部 嘉幸	9
中京大学文学会 中京国文学 三三 (二・三〇)	接続詞「なので」の書き言葉における使用について —「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を資料として—	宮内 佐夜香	20
筑波応用言語学研究 一九 (二・二二)	迂言的受身表現「くを受ける」について —漢語サ変名詞の特徴を中心に—	孟 熙	27
筑波応用言語学研究 一九 (二・二二)	「ノコト目的語」におけるコトの分析 —必須のコトから介在可能なコトへの連続性—	湯本 かほり	34
筑波大学大学院 文芸言語研究 言語篇 六一 (二・三三)	名詞述語文の生成語彙論的解釈	今田 水穂	41
筑波大学大学院 文芸言語研究 言語篇 六一 (二・三三)	叙時的時制と叙想的アスペクト	渡邊 淳也	51
筑波大学大学院 文芸言語研究 言語篇 六三 (二・三三)	原因の「〜で」と「〜から」について	杉本 武	73
天理大学 外国語教育 理論と実践 三九 (二・三〇)	主要部内在関係節再考	田中 紀男	81
天理大学学報 六五一 (三・一〇)	日本語の非限定的名詞修飾節と推論用法の「〜か ら」節について	岩田 良治	87
東海大学紀要 国際教育センター 三 (二・三〇)	日本語心理動詞の性質について —受身・使役の 考察から—	外崎 淑子	92
東京大学言語学論集 三二 (二・二九)	アスペクト形式「ている」の成立について	野田 高広	99
東京大学言語学論集 三三 (三・一)	Formal Description and Explanation of Temporal Properties of Sentences	Machida, Ken	111
東京大学国語国文学会 国語と国文学 八九・一一 (二・一一)	文末ノダ文の構造と機能	井島 正博	—
東京大学大学院総合文化研究科言語情報 科学専攻紀要 Language, Information, Text 19 (二・一一)	On the Bi-clausality of the Productive Causative Construction in Japanese: Evidence from ERP Experiments	Takane, Ito	117
東京外国語大学 日本研究教育年報 一七 (三・三〇)	日本語の「ある／いる」構文の類型 —命題の意 味的特徴に注目して—	韓 必南	123
東京学芸大学紀要 総合教育科学系 二 六三 (二・二二)	二格の起点用法について —指回性からの説明—	岡 智之	133
東京学芸大学国語国文学会 学芸国語国 文学 四五 (二・三二)	主格を示す助詞の頻度分布と主格省略の問題 —結合価理論を参考にした計量的分析—	真田 治子	139
東京学芸大学国語国文学会 学芸国語国 文学 四五 (二・三二)	副助詞ナドの機能	小林 正行	146
東京学芸大学国語国文学会 学芸国語国 文学 四五 (二・三二)	「名詞+動詞連用形+する」型動詞と「名詞+動詞」 型動詞の語構成と自他	阿部 志野歩	***
同志社大学国文学会 同志社国文学 七八 (二・三三)	古本説話集の「けり」のテキスト機能 —「にけり」「係り結び」の終結機能—	藤井 俊博	八



同志社大学日本語・日本文化研究 一〇 (二二・11)	受給動詞の用法の一考察 — シナリオにおける用例の分析 —	米澤 昌子	153
東北大学文学会 文化 七六三・四 (二二・11)	現代日本語「た」の意味	大木 一夫	二六
東北大学文学研究科研究年報 六一 (二二・11)	事態を描かない文・素描	大木 一夫	二六
常盤大学コミュニケーション振興学部紀要 コミュニケーション研究 二二 (二二・三)	On the Distribution of the Interpretations of the te-iru Construction in Japanese	Tadashi Baika	163
常盤大学コミュニケーション振興学部紀要 コミュニケーション研究 一四 (二二・三)	「かけ」名詞構文について	梅 香 公	177
富山大学国語教育 三七 (二二・一)	準体句述部の文語連体形の機能 — 『中華若木詩抄』の形容詞・形容動詞等における —	樋野 幸男	182
名古屋大学 Nagoya Linguistics (名古屋 屋言語研究) 6 (二二・11)	指示対象の捉え方から見るソトアの使い分け	モスタファ・ヤスミン	186
名古屋大学 Nagoya Linguistics (名古屋 屋言語研究) 6 (二二・11)	自発・受身の成立条件 — 思考動詞ラレル文ル形のテンスの意味に注目して —	高橋 芽衣子	191
名古屋大学 Nagoya Linguistics (名古屋 屋言語研究) 6 (二二・11)	奈良平安朝文芸における過去辞が介入する分詞用法	釘 貫 亨	四〇
名古屋大学言語文化研究会 ことばの科 学 二五 (二二・11)	機能動詞「与える」と「加える」のラ格名詞について	朱 薇 娜	197
名古屋大学言語文化研究会 ことばの科 学 二六 (二二・11)	コーパスに基づく日本語の文法形式の使用傾向の記述 — 「大きい・な」「小さい・な」の使い分けについて —	劉 善 鈺	205
名古屋大学 日本語・日本文化論集 一九 (二二・11)	上代における終助詞カの意味変化とカ文の構造変化	小 出 祥 子	213
名古屋大学大学院 言葉と文化 (Issues in Language and Culture) 一四 (二二・11)	終助詞「な」が表す感情表出機能の実体	松 岡 みゆき	221
奈良女子大学日本アジア言語文化学会 叙説 四〇 (二二・11)	語用論の観点から見た認識のモダリティ形式「カモシレナイ」について	國 澤 里 美	233
鳴門教育大学国語教育学会 語文と教育 二七 (二二・11)	広告表現等における(終止形準体法)について	島 田 泰 子	242
南山大学大学院 南山言語科学 七 (二二・11)	サエを含む文の意味表示	田 中 大 輝	250
南山大学大学院 南山言語科学 七 (二二・11)	「ながら」「つ」間に見られる統語的差異について	駕 海 芙 美	259
西日本国語国文学会会報 平成二四年度 (二二・11)	補助動詞「テシマウ」の文法化	近 藤 かをり	265
西日本国語国文学会会報 平成二五年度 (二二・11)	ロシア資料にみえる「テオル」「チオル」「トル」	久 保 園 愛	273
日中言語研究と日本語教育研究会 日中 言語研究と日本語教育 五 (二二・11)	格助詞「を」と「に」の対象表示用法について	佐 藤 友 哉	四六
日中言語研究と日本語教育研究会 日中 言語研究と日本語教育 六 (二二・11)	日本語における「ヴオイス」を再考するために — 主語が動きの主体か否か —	早 津 恵 美子	279
日中対照言語学会 日中言語対照研究論 集 一五 (二二・11)	動詞と日本語の多様性	工 藤 真 由 美	287
	現代日本語のテンスとムード — 反事実仮想を中心に —	工 藤 真 由 美	292

日本英語学会 English Linguistics 29-2 (11・11)	NUMERAL INDETERMINATE PHRASES AND THEIR EXISTENTIAL QUANTIFICATION BY MO IN JAPANESE	TOSHIKO ODA	301
日本英語学会 English Linguistics 30-1 (11・1)	THE MORPHOLOGY AND INTERPRETATIONS OF GRADABLE ADJECTIVES IN JAPANESE	CHIGUSA MORITA	317
日本英語学会 English Linguistics 30-1 (11・1)	NOMINALIZATION IN THE JAPANESE PREDICATE DOUBLING CONSTRUCTION	YUKI ISHIHARA	330
日本語学会 言語研究 一四一 (11・11)	イ落ち：形と意味のインターフェイスの観点から	今野 弘章	342
日本語学会 言語研究 一四一 (11・11)	The Presuppositional Nature of <i>izyoo(-ni)</i> and <i>surai</i> Comparatives: A Note on Hayashishita (2007)	YUSUKE KUBOTA	356
日本語文化研究会 日本語文化研究 一七 (11・11)	「〜はおろか」の統語的性格と表現性 —「〜はもちろんだ」との対比において—	藤田 保幸	五二
日本語文化研究会 日本語文化研究 一八 (11・11)	引用述語省略説の残映、その後	藤田 保幸	六一
日本語学 研究と資料 三五 (11・14)	国定国語教科書における文末思考動詞	渡辺 由貴	363
日本語教育研究会 日本語／日本語教育研究 三 (11・15)	時の「特化」を表す名詞述語文 —「時だ」、「〜時だ」、「〜時だ」などを例に—	田中 寛	370
日本語教育研究会 日本語／日本語教育研究 四 (11・16)	「使役態」に言及せずに「使役表現」を教えるには——一つの「教授法」	庵 功雄	380
日本語教育研究会 日本語／日本語教育研究 四 (11・16)	機能動詞「受ける」のラ格名詞に対する一考察 —漢語動名詞を中心に—	朱 薇娜	389
日本女子大学 国語国文学会 国文目白 五一 (11・1)	書きことばに現れる「ません」と「ないです」	落合 智子	398
日本比較文化学会 比較文化研究 一〇七 (11・16)	プロトタイプ理論から見る日本語の形容動詞	毛 瑩	399
ノートルダム清心女子大学紀要 外国語・外国文学編 三七一 (11・11)	Extending the Binding Domain of Anaphora in Japanese	Mari SAKAGUCHI	402
ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編 三七一 (11・11)	形態素順序に関する、現在進行中の変化 —複合動詞の使役形・受身形—	山部 順治	411
東アジア日本語教育・日本文化研究学会 東アジア日本語教育・日本文化研究 一六 (11・11)	日本語の条件表現における多層的なネットワークモデルの構築——認知言語学のアプローチから——	劉 曉華	421
東アジア日本語教育・日本文化研究学会 東アジア日本語教育・日本文化研究 一六 (11・11)	中世語以降の「ラ複合接続(助)詞」の文法化の特徴について	劉 洪岩	435
東アジア日本語教育・日本文化研究学会 東アジア日本語教育・日本文化研究 一六 (11・11)	助詞「ぞ」と推量系助動詞との関わり——万葉集・上代歌謡を中心に——	伊藤 亜希子	443
姫路獨協大学大学院 日本語教育論集 二一 (11・11)	「私は」と「私ゆ」による発話解釈への影響	浅津 嘉之	451
広島大学 日本語教育研究 一三三 (11・11)	第二類否定疑問文「ナイカ」「ノデハナイカ」に関する考察	西嶋 千恵	455
広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部文化教育開発関連領域 六一 (11・11)	否定命令としての「じゃないか」——語用論的側面から——	白川 博志	459
広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部学習開発関連領域 六一 (11・11)	述語中心文法の可能性——新しい教育文法への試み——	妹尾 知昭	464

広島女学院大学日本文学 二二 (二・二七)	『宇津保物語』における「奏す」「啓す」の特殊用法 (一) — 「奏す」と「申す」の意味的關係 —	柚木靖史	七〇
広島女学院大学日本文学云 国語国文学誌 四二(二二・二二)	「なぐ」と「ないで」をめぐる一考察 — 述語のコントロール性とモダリテイの観点から —	王 爽	469
広島女学院大学日本文学云 国語国文学誌 四三(二二・二二)	『宇津保物語』における「奏す」「啓す」の特殊用法 (二) — 「奏す」「啓す」「申す」の意味的關係 —	柚木靖史	八四
フェリス女学院大学文学部紀要 四七 (二・二〇)	日本語の条件表現における後件のモダリテイ制約	奈良 夕里枝	480
福岡教育大学紀要 第一分冊 文科編 六一(二二・二二)	上代におけるモノソ文の用法	勝 又 隆	九九
福岡教育大学国語科研究論集 五四 (二・二〇)	上代における「連体形+モノ」形式の分布について	勝 又 隆	一〇五
藤女子大学国文学雑誌 八八(二二・二二)	キリシタン資料における下二段活用動詞「アイツク」について	漆 崎 正 人	一一二
文教大学国文 四二(二二・二二)	逆接とは何か	鬼 山 信 行	486
文教大学国文 四一(二二・二二)	条件節事態先行性について	鬼 山 信 行	494
文教大学文学部紀要 二五一(二二・一九)	テキストからみた「〜と」と「〜たら」の複文 — すでにあるできごとを描写する用法を中心に —	宮 部 真 由 美	505
文教大学文学部紀要 二六二(二二・二二)	タラ条件形を従属節とする従属複文の主節と従属節の意味類型と複文	宮 部 真 由 美	521
文教大学大学院言語文化研究科付属言語文化研究所紀要 言語と文化 二四 (二・二二)	接続助詞シについて	近 藤 研 至	536
文献探究の会 文献探究 五一 (二・二二)	ロシア資料の動詞の活用	久 保 園 愛	544
法政大学国文学云 日本文学誌要 八六 (二・二七)	「書かないです」と「書きません」	尾 谷 昌 則	二一九
北海道教育大学語学文学云 語学文学 五二(二二・二二)	接続詞の二重使用の承接順序について — 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いた再検討 —	馬 場 俊 臣	550
北海道教育大学語学文学云 語学文学 五二(二二・二二)	「こととする」について — 人称・時制の観点から —	阿 部 二 郎	562
北海道文教大学論集 一四(二二・三三)	現代日本語の「つつある」の事象投射構造的分析	小 西 正 人	567
萬葉学会 萬葉 二二五(二二・三九)	萬葉集におけるラムの出發と展開 — ラシとの交渉 —	内 田 賢 徳	二二五
三重大学 日本語学文学 一三三 (二・二〇)	助詞「が」と「を」の研究 — 「水が飲みたい」と「水を飲みたい」から —	岡 田 佳 美	575
宮城学院女子大学日本文学云 日本文学ノート 四八(二二・三七)	『日本畫異記』の敬語の補助動詞	田 島 優	二二六
武蔵野学院大学大学院研究紀要 六 (二・二四)	表現者の使用言語選択意識についての考察 — 共通話話における助動詞を手がかりとして —	坂 詰 力 治	二四三
明治大学日本文学 三八(二二・二三)	近代東京語における「てくんなさい系統」行為要求表現の考察	陳 慧 玲	583
安田女子大学日本文学云 国語国文論集 四二(二二・二二)	日本語と並文における与格受益者の許容条件の再考	宮 岸 哲 也	591
山口大学教育学部研究論叢 芸術・体育・教育・心理 六二・三三(二二・三二)	文法の社会的機能と文法教育に関する考察	原 中 田 理 拓 馬	596

山口大学教育学部研究論叢 人文科学・社会科学 自然科学 六二・二二 (二・三・一)	現代語の終助詞「とも」の働き	中野伸彦	一四九
山口大学文学部国語国文学会 山口国文 三五(二・三)	格助詞「に」と「へ」の使い分けについて —アンケート調査の分析を基に—	郭一潔	600
立正大学国語国文 五〇(二・三)	名詞句における「ような」と「ように」の交替 —比況用法の場合—	光信仁美	608
立命館大学文学部人文学会 立命館文學 六三三(二・三・一)	場所格の「に」「を」と述語「ある」との選択関係	佐野まさき	613
龍谷大学国際センター研究年報 二二(二・三)	鷗外初期文語体作品の疑問表現について —『水沫集』所収作品を資料として—	藤田保幸	620
麗澤大学紀要 九五(二・二二)	共起関係を表す時間節のテンスと文の解釈 「〜みたいだ」文法化の過程	家田章子	628
麗澤大学大学院 言語と文明 一〇(二・三)	日本語の理由表現・理由疑問表現	杉浦滋子	638
麗澤大学大学院 言語と文明 一一(二・三)	所有者受動文に関する一考察 「足をつかまれる」と「足を痩せる」	杉浦滋子	649
和光大学表現学部紀要 一一(二・三)	「格形容詞を述語とした「は」も「が」も使えない文」—映画「面白かったね」という文をどう捉えるか—	天野みどり	657
早稲田大学国語教育研究 三三(二・三)	因果関係の複文と意志的制御	荻宿紀子	662
早稲田大学国文学会 国文学研究 一七〇(二・三・六)		森山卓郎	669
早稲田大学大学院 教育学研究科紀要別冊 一九二(二・三)	江戸後期から明治一〇年代までの「言う」の意味を表す尊敬表現 —「おつしやる」を中心に—	山田里奈	674
早稲田大学大学院 教育学研究科紀要別冊 二〇二(二・三・三)	江戸後期から明治一〇年代までの「見る」の尊敬表現 —「みろうじる」系を中心に—	山田里奈	681
早稲田大学大学院 教育学研究科紀要別冊 二二一(二・三・九)	明治二〇年代までにおける「する・なる」の尊敬表現形式 —「おきなさる」「くちなさる」「おくだ」系を中心に—	山田里奈	688

\*\*\*・・・著作権者と連絡がとれなかったため紹介にとどめた論文

第三分冊（語彙）

語彙

青山学院大学日本文学会 青山語文 四二（二・三）	「ひとつはちす」考	佐伯真一	一
茨城大学文学部紀要 人文コミュニケーション学 シオン学科学論集 一五（二・三九）	『対訳名物図編』の訳語について —『増訂華英通語』『英語箋』と一致する訳語を中心に—	櫻井豪人	1
宇都宮大学教育学部紀要 六三— （二・三）	現代日本語「自己実現」の意味内容の変質 —テキストマイニングの手法を用いた通時的考察—	佐々木英和	7
宇都宮大学国際学部研究論集 三三 （二・三）	學術用語としての感情概念の検討 —心理学における表情研究を例に—	中村真	17
宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター年報 五（二・三）	日本語における「重言」およびその教育法	方小賀	25
海山文化研究所 対照言語学研究 二二 （二・三）	いま、いまや、いまごろ、いまさら —テンポラリティとモダリティの表現—	酒井悠美	29
海山文化研究所 対照言語学研究 二二 （二・三）	上代文献に見られる「然」字の用法について —『万葉集』を中心として—	楊瓊	38
海山文化研究所 対照言語学研究 二二 （二・三）	平安期日本語における感情的な状態をあらわす形容詞を述語とする文の対象語についての考察 —「いとほし」「かなし」「ゆかし」の分析をおして—	高山道代	42
海山文化研究所 対照言語学研究 二二 （二・三）	意志動詞・無意志動詞再考 —「意図」と「制御性」を中心に—	樊陸 彭 廣	48
海山文化研究所 対照言語学研究 二二 （二・三）	よくぞ、よくも —記述の文と情動表出の文—	酒井悠美	58
愛媛大学文学部 人文学論叢 一五 （二・三）	古代日本語動詞の意味構成 —概念カテゴリーを通して—	塚原竜一	62
大阪大学大学院文学研究科 待兼山論叢 四六 文学篇（二・三）	中古語トカクの意味的特徴 —現代語との対照—	清田朗裕	69
大阪大学大学院文学研究科 待兼山論叢 四六 日本学篇（二・三）	現代新聞における略語使用の変動傾向とその類型	タチアーナ・クドヤーロワ	78
大谷大学文学部 文芸論叢 七八 （二・三）	『平家物語』と『太平記』のことば（二） —形容詞「あやまし」の語義—	池田敬子	7
岡山大学言語国語国文学会 岡大國文論 稿 三九（二・三）	『播磨国風土記』の「南昆都麻」について	大坪併治	二五
岡山大学言語国語国文学会 岡大國文論 稿 四〇（二・三）	古訓三題「軽カタヒラ・依ヨスキ・逮ウ」について	大坪併治	二七
お茶の水女子大学人文科学研究 八 （二・三）	「美味」を意味する語の使用と性差 —「おいしい」を中心に—	高崎みどり	86
学習院大学国語国文学会誌 五六 （二・三）	小学校配布物から情報を得るために必要な語彙の探索 —使用頻度の高い語彙に注目して—	地引愛	93
学習院女子大学紀要 一五（二・三）	外来語研究における意味分析 —「ムード」と「雰囲気」の類義分析による事例研究—	佐藤琢三	102
金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要 四（二・三）	容易の意の「ヨシ／＼ヨイ」の語史	近藤明	一九
川村学園女子大学研究紀要 一三— （二・三）	「かまと詞大概」の語彙 —「諸人片言なをし」等との比較を通して—	長崎靖子	108

関西学院大学人文学会 人文論究 六一四 (二二・一)	石干見の呼称に関する覚え書き	田和正孝	二四
関西学院大学日本文学会 日本文藝研究 六五一 (三三・一〇)	俗語訳成立史(七)	田中康二	三八
岐阜聖徳学園大学国語国文学 三二 (二二・一〇)	天草版『エソボのハブラス』の助詞の語彙 ―天草版『平家物語』・『平家物語』(高野本)と の比較を通して―	濱千代 いづみ	117
九州大学国語国文学会 語文研究 一一三 (二二・六)	『風葉和歌集』における人物呼称	宮崎裕子	四九
九州大学国語国文学会 語文研究 一一六 (二二・一)	上代における「託」の訓に関する一考察	藤崎祐二	五六
京都大学文学部国語学国文学研究室 国 語国文 八二一 (二三・二)	『竹取物語』くらのちの皇子の話 ―その偽語源 説について―	内田順子	六八
京都女子大学国文学会 女子大國文 一五三 (二三・九)	『老子道徳経』古点の和訓語彙放略	西崎亨	*
京都橘大学研究紀要 三九 (二三・二)	動作範囲の拡張	宮島達夫	132
京都府立大学国中文学会 和漢語文研究 一一 (三三・一一)	「いづち」から「ぢち」へ	松本朋子	七六
熊本大学文学部国語国文学会 国語国文 学研究 四七 (二二・二)	『看聞日記』に於ける「生涯」を含む熟語の意味 ―「及生涯」「懸生涯」「失生涯」「生涯谷」等の意味 について―	堀畑正臣	八五
皇学館大学人文学会 皇学館論叢 四六一 (三三・一)	共与(ムク)攷	金泳和	九三
甲南女子大学研究紀要 文学・文化編 四九 (二三・三)	仮想現実の設定とソ系列指示詞 ―古代日本語を 中心に―	藤本真理子	138
甲南女子大学国文学会 甲南国文 五九 (二二・一〇)	「玄奘三蔵絵」詞書における指示語「かくて」 ―和文系語彙と訓読系語彙の併用の観点から―	西田隆政	142
神戸松蔭女子学院大学 Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin (TALKS) 16 (三三・三)	語彙分解によるアスペクトの分析	郡司隆男	147
神戸松蔭女子学院大学学術研究会 Journal of the Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University 1 (三三・一)	日本語の基本語彙に関する研究	徳山孝子	157
国立国語研究所 国語研プロジェクトレ ビュー 三三(冊子版二) (三三・三)	共通感覚におけるイメージ用語の文化的特性 ―日本女性の洋装におけるイメージ用語を中心に―	島村直己	161
国立国語研究所 国語研プロジェクトレ ビュー 四一 (三三・二)	『明六雑誌コーパス』『太陽コーパス』から見る近 代語彙	田中牧郎	166
国立国語研究所論集 六 (三三・二)	テキストにおける語彙の分布と文章構造	山崎誠	171
国立国語研究所論集 六 (三三・二)	大正期における外来語の増加に関する計量的分析 大規模コーパスを用いた形容詞と名詞のコロケイ ションの記述的研究 ―日本語教育のための辞書 作成に向けて―	鄧牧	174
国立国語研究所論集 六 (三三・二)	在华宣教師の洋学資料に見える四字語 ―蘭学資料の四字漢語との対照を兼ねて―	朱京偉	188
埼玉大学紀要 教養学部 四八二 (三三・一〇)	「生」と「料理の三角形」―意味派生の基盤をめ くって―	小出慶一	202
静岡県立大学短期大学部言語文化学会 言語文化研究 二二(三三・三)	新聞記事を資料とした言語意識調査 ―新語“なにげに”を例に―	新野直哉	209

島根大学 島大言語文化 三二 (二・二)	『和漢三才図会』の語彙 — 「もろし」の意義 —	田 籠 博	217
十文字学園女子大学短期大学部国語国文学会 十文字国文 一八 (二・二)	対義関係の二字熟語について	中 川 秀 太	二〇三
首都大学東京・東京都立大学心理学研究 二二 (二・二)	他者が理解している新語の意味の推測 — 「ツンデレ」における自己中心性バイアスの検討 —	瀧 澤 純 渡 辺 未 由 希	224
白百合女子大学言語・文学研究センター 言語・文学研究論集 一二 (二・二)	「一所懸命」の成立に関する一考察 — 漢語受容史研究の観点から —	鄭 艷 飛	二一〇
白百合女子大学国語国文学会 国文白百合 四一 (二・二)	西周における「哲学」という訳語の形成について	孫 彬	228
成城大学文学部 成城文芸 二二〇 (二・二)	ヨリ三態 — 日本語雑記・後拾遺 —	工 藤 力 男	二二〇
成城大学文学部 成城文芸 二二二 (二・二)	絆 里山 障がい者 — 日本語雑記・続後拾遺 —	工 藤 力 男	二二四
成城大学文学部 成城文芸 二二三 (二・二)	一兵卒 — 辞苑閑話・一	工 藤 力 男	二三〇
清泉女子大学紀要 六〇 (二・二)	狂詩の漢字語 — 『東海道中詩』の場合 —	荒 尾 禎 秀	二二三
専修大学人文科学研究 人文科学年報 四三 (二・二)	「平産」から「安産」へ	鈴 木 丹 士 郎	二四一
大東文化大学紀要 社会科学 五一 (二・二)	高校野球選手におけるスポーツオノマトヘに関する研究 — …使用実態の把握と指導場面における効果的な使用法の検討	遠 藤 俊 郎 他四名	232
拓殖大学大学院 言語教育研究科研究年報 一三 (二・二)	視点の違いによる次元形容詞の使い分け — 「大きい・小さい」と「高い・低い」 —	劉 笑 倩	242
地域文化研究会 地域文化研究 一〇 (二・二)	日本の膾と韓国の膾の食文化史について	洗 秋 翔	249
筑紫学園大学・短期大学部 人間文化研究所年報 二二 (二・二)	固有名詞のカテゴリ要件	緒 方 隆 文	261
筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻 文芸言語研究 言語篇 六一 (二・二)	抄物資料におけるオノマトヘの役割	坪 井 美 樹	269
鶴岡八幡宮悠久事務局 悠久 二二八 (二・二)	むすびということばとその拡がり	毛 利 正 守	二五六
帝塚山学院大学 こたはら 三三三 (二・二)	副詞「かなり」の語史(付、形容動詞「かなり・だ」)	加 藤 浩 司	二六二
東京学芸大学国語国文学会 学芸国語国文学 四四 (二・二)	和語接頭語の意味用法の分類	田 村 紘	276
東京女子大学日本文学 一〇九 (二・二)	類義語研究 — 「結果」と「成果」 —	立 山 智 絵	285
同志社大学国文学会 同志社国文学 七九 (二・二)	平安物語の継子いじめの連想作用 — 「継母」「継父」「継子」「継女」の用例分析から —	森 あかね	二六九
同志社大学大学院日本語学研究会 同志社日本語研究 一六 (二・二)	『中央公論』一〇一年の高頻度語彙および増減傾向	入 江 さやか	294
同志社女子大学大学院文学研究科紀要 二二 (二・二)	ひっじ草(睡蓮) — 「日花」について —	吉 野 政 治	二七六
同志社女子大学大学院文学研究科紀要 二二 (二・二)	『百人一首』の「暁」考	吉 海 直 人	二八二
東北大学大学院文学研究科言語科学専攻 言語科学論集 一六 (二・二)	接辞性字音語基の造語力 — 「者」「家」「人」を対象として —	曾 睿	300

徳島大学国語国文学 二六 (一三三)	明治期の郷土誌に於ける『帰化語』について ―香川県三野郡を例として、帰化語の概念の変化 歴史的背景、文化移入との関わりなど―	島田 治	一九〇
名古屋大学言語文化研究会 ことばの科 学 二五 (一一二)	中国語話者による複合動詞「V1ー飽きる」のV1 +V2結合意識	杉村 泰	306
名古屋大学 日本語・日本文化論集 一九 (一一三)	「せつない」と「やるせない」の意味分析	加藤 恵梨	314
名古屋大学 日本語・日本文化論集 一九 (一一三)	多義語における統合的關係と多義的別義の關係	靱 山 洋介	323
名古屋大学大学院国際言語文化研究科 言語文化論集 三四(一) (三二二)	コーパスを利用した複合動詞「V1ー通る」の意味 分析	杉村 泰	334
名古屋大学大学院国際言語文化研究科 言語文化論集 三四(一) (三二二)	「言い訳考(序説)	靱 山 洋介	341
名古屋大学大学院国際言語文化研究科日 本言語文化専攻 言葉と文化 一四 (三二二)	漢語サ変動詞「除Nする」の意味と構文	張 善実	349
奈良女子大学日本アジア言語文化学会 叙説 四〇 (一一三)	正倉院文書の「早速」―和製漢語のうまれる場面 ―	桑原 祐子	二〇五
南山大学日本文化学科学論集 一一 (二二二)	千早城と歌語「ちはやぶる」試論	森 田 貴之	二二八
日本学生支援機構 日本語教育センター 紀要 九 (一三七)	動作動詞の日中対照研究「もむ」・「こねる」と 「揉」	水落 いづみ	358
日本心理学会 心理学研究 八三(一) (二二〇)	自他の性格評定に使用可能な擬態語性格尺度の構 成	小松 孝至 他三名	366
日本国文学会 語文 一四三 (二二〇)	童謡の歌詞におけるオノマトペ―時代差の観点 から―	森 山 未季子	371
日本通訳翻訳学会 通訳翻訳研究 一三 (二二二)	『猶太人の浮世』から『愛患余生』へ―語彙の 選択から見る近代日中間の「重訳」―	呉 燕	377
日本比較文化学会 比較文化研究 一〇(一) (二二六)	漢語の読み理解と意味理解にコンテキストが果た す役割	平 川 彩子	385
日本文学協会 日本文学 六二(二二) (三二二)	『源氏物語』の妻妾の呼称―光源氏の妻妾の呼 称の独自性―	鶴 飼 祐江	三二九
東アジア日本語教育・日本文化研究学会 東アジア日本語教育・日本文化研究 一六 (一三三)	否定表現「不」の文法機能	林 楽常 林 楽青	390
東アジア日本語教育・日本文化研究学会 東アジア日本語教育・日本文化研究 一六 (一三三)	日本語絵本における語の使用の特徴と伝達内容	村 上 康子	400
東アジア日本語教育・日本文化研究学会 東アジア日本語教育・日本文化研究 一六 (一三三)	ムタ放―韓国語(moto)を中心に―	金 泳和	408
東アジア日本語教育・日本文化研究学会 東アジア日本語教育・日本文化研究 一六 (一三三)	日本語におけるカタカナ言葉の普及とその原因 ―グローバル化の観点から―	ケレウリゼ・ 二ノ	417
兵庫県立大学神戸学園都市キャンパス学 術研究会・兵庫県立大学政策科学研究所 人文論集 四七 (一一三)	商品名および店名・施設名に利用されているオノ マトペ	田 守 育啓	426
広島女学院大学日本文学 二二 (二二七)	「リアル」を構成要素とする複合名詞の語彙的特徴	渡 邊 ゆかり	438
広島女学院大学日本文学 二三 (二二七)	「個人的な十名詞」「私的な十名詞」の使い分け	渡 邊 ゆかり	454



広島女学院大学院言語文化論叢 一六(二二二)	「リアルな」名詞と「リアル」名詞の互換性	渡邊 ゆかり	465
福島大学国語教育文化学会 言文 六〇 (二二二)	副詞「つらつら」の意味変化 — インターネット 資料を中心に —	佐藤 宣男	480
藤女子大学国文学雑誌 八六(二二二)	『羅葡日対訳辞書』におけるCuriosの項目をめぐる 考察 — Charade, amor, たんせ(二)んせ(二) のありよう —	漆崎 正人	二二五
藤女子大学国文学雑誌 八七 (二二二)	『羅葡日対訳辞書』における「こんせつ(懇切)」の 現れ方をめぐって	漆崎 正人	二四二
佛教大学 文学部論集 九七(二二三)	古代日本語の船舶の名称における異文化の要素に ついて — さばにを中心に —	黄 當時	485
北海道教育大学国語国文学会・札幌 札 幌国語研究 一七(二二八)	「兎」に関することわざ — 兎をどう捉えてきたか	馬場 俊臣	495
北海道教育大学函館人文学会 人文論究 八二(二二三)	「電子メール」とその競合的同意語の選択に関わ るメカニズムの分析(二) — 局所的頻度要因の 影響 —	福田 薫	499
万葉学会 万葉 二二六(二二二)	翻訳語の射程 — 古事記「心前」・萬葉集「無暇」 —	内田 賢徳	二四八
宮城学院女子大学日本文学会 日本文学 ノート 四七(二二七)	漢語系感謝表現の源流	田島 優	二五三
武庫川女子大学言語文化研究所年報 二二三(二二二)	愛作家と愛猫家の表現法 — 投稿文における語彙 と表現 —	佐竹 秀雄	505
明海大学外国語学部論集 二五 (二二二)	日本語の国際進出 — グーグルインサイトにみる 外行語のトレンド —	井上 史雄	513
明治大学日本文学 三八(二二三)	動物を教える助数詞「隻」について	王 鼎	521
明治大学日本文学 三八(二二三)	明治時代語における「ぼく」の諸相	金 連福 花 鼎	530
明治大学大学院 文学研究論集 三八 (二二二)	助数詞「條々」について	王 鼎	537
目白大学文学研究 九(二二三)	「違った」考	山西 正子	547
安田女子大学日本文学会 国語国文論集 四三(二二二)	教材「オツベルと象」の語彙研究	河内 昭浩	552
山形県立米沢女子短期大学紀要 四八 (二二二)	神勅の伝来 — 『古事記』「賜」の用字意識を通し てみた「言依賜」 —	北野 達	二六五
山口大学人文学部国語国文学会 山口国 文 三六(二二三)	日本語を学生と学ぶ(余滴) — 「神仏を拝む詞」 「喧嘩の際の決まり文句」など —	添田 建治郎	二七六
立教大学日本文学 一〇九(二二二)	「いなかたち」考 — 「虫めづる姫君」の難語の解 釈 —	櫻井 靖久	二八四
立正大学国語国文 五一(二二三)	『とほがたり』の副詞語彙について — 基礎調 査と「いと」と諸品詞の結びつき —	岡田 袈裟男	557
立命館大学日本文学会 論究日本文学 九七(二二二)	類義語としてのカタカナ語・和語の意味相違の考 察 — 「テーブル」「デスク」「机」の意味相違及び 「テーブル」の基本語化 —	陳 暁静	561
早稲田大学国文学会 国文学研究 一六七(二二六)	副詞「たいそう」の変遷 — 近代語を中心に —	市村 太郎	568
早稲田大学院 教育学研究科紀要 別冊 二〇一(二二九)	成句「梅檀は二葉より」 — 述語部分の変遷 — カウバシからカンバシへ —	池上 尚	574

\* …… 論説資料のページ数の制約により、掲載できなかった長大な論文  
\*\* …… 著作権者と連絡がとれなかったため紹介にとどめた論文

第四分冊 (文章・文体・音声・音韻・方言)

一 文章・文体

大谷大学文芸学会 文芸論叢 七九 (二・二一〇)	『続日本紀』宣命の表現 — 漢語から日本語への 翻案をめぐって—	根来 麻子	一
岡山大学大学院教育学研究科研究集録 一五三 (二・二七)	レトリック作文の可能性 その一 — 技法の体系 ・配列・反復—	伊土 耕平	1
共立女子大学文芸学部紀要 五九 (二・三・一)	近代における女性書簡文の変遷 — 文体と結語を 焦点として—	茗荷 円	八
熊本大学文学部国語国文学会 国語国文 学研究 四八 (二・三・二)	歌詞の中の「生きさま」と「生き方」 — 共時的 な、あるいはデジタル的なものの見方の浸透—	塚本 泰造	一九
国立国語研究所論集 三 (二・二・五)	接統助詞とジャンル別文体的特徴の関連について — 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を資料と して—	宮内 佐夜香	5
静岡県立大学短期大学部言語文化学会 言語文化研究 一一 (二・二・三)	『反古袋』における小杉天外の文末表現	田貝 和子	二七
上智大学国文学科紀要 三〇 (二・三・三)	山田美妙「武蔵野」における文末時制 — 節 (Clause) を用いた文体分析の試み (五) —	服部 隆	三三
白百合女子大学研究紀要 四八 (二・二・二)	覚一本平家物語の文頭語に見る文章の展開 — 延慶本との比較から—	中里 理子	12
全国大学国語国文学会 文学・語学 二〇六 (二・三・七)	美妙の〈翻訳〉 — 骨は独逸肉は美妙／花の茨 茨の花〉の試み—	大橋 崇行	五三
東京大学国文学論集 八 (二・三・三)	掛詞の表現構造	萩野 了子	五九
東京女子大学日本文学 一〇九 (二・三・四)	字幕と吹き替えの比較	梁瀬 みき	21
同志社大学大学院日本語研究会 同志 社日本語研究 一六 (二・二・九)	小説における「コレ」と「ソレ」の文脈展開機能 — 持ち込み内容を中心に—	張 子如	30
名古屋大学国語国文学 一〇五 (二・二・一)	日本語社説の文章構造における統括性 — 提題表 現と叙述表現に注目して—	Didik Nurhadi	37
日本文体論学会 文体論研究 五九 (二・三・四)	翻訳が近代日本文学の文体の成立に果たした役割	照木 健	47
日本文体論学会 文体論研究 五九 (二・三・三)	日・米・独の新聞記事における文体比較	楠根 重和	58
広島大学国語国文学会 国文学叢 二二五 (二・二・九)	醍醐寺蔵『探要法花験記』日本・中国両部の比較 — 和化漢文用字法の共通基盤解明に向けて—	磯貝 淳一	六七
広島大学大学院 論叢 国語教育学 復 刊三 (二・二・七)	要約文の妥当性に関する指導の考察	早野 賢謙	77
北海道教育大学紀要 人文科学・社会科 学編 六三二 (二・三・二)	接統表現の二重使用と文章ジャンルについて	馬場 俊臣	84
明治大学大学院 文学研究論集 三七 (二・二・九)	明治期翻訳文学作品における欧文直訳表現 — コナン・ドイル著「ボスコム谷の謎」を資料と して—	八木下 孝雄	90
山口大学教育学部研究論叢 人文科学・ 社会科学 自然科学 六一二 (二・二・一)	英文訓読が拓いたもの	藤本 幸伸	95
琉球大学留学生センター 留学生教育 一〇 (二・三・二)	助詞の相対頻度と漱石一〇作品の分類	金城 克哉	100

日本語の指導における教育的文体論 — 随筆的評論教材を活用して —

立川和美

二 音声・音韻

アクセント史資料研究会 論集 九  
(二・三・二二)

『日本考略』に見られる奇語のアクセント  
— 一、二拍語を中心に —

馬之濤

アクセント史資料研究会 論集 九  
(二・三・二二)

古代アクセントの終焉 — 京都方言アクセント体系大変化の要因について —

鈴木豊

大阪府立大学 言語文化化学研究 日本語  
日本文学編 八 (二・三・三)

平曲譜本の音便表記 — 青洲文庫本平家正節と尾崎家本平家正節(二) —

奥村和子

岡山大学言語国語国文学会 岡大國文論  
稿 四二 (一・三・三)

伊沢修二『日清字音鑑』における「韻尾」の表記方法について

張照旭

関西外国語大学留学生別科日本語教育論  
集 二二 (一・三・二二)

文字表記と音声知覚の関連性 — 表記と聴取データの比較から —

本橋美樹

岐阜大学教育学部研究報告 人文科学  
六一・二 (一・三・二)

いきものがかりの言語学 — 音声的特徴

山田敏弘

国立音楽大学 研究紀要 四七  
(二・三・一〇)

日本語における連濁の原理 — 音楽の拍節理論による日本語アーティキュレーションの音韻論的考察 —

古山和男

小出記念日本語教育研究会論文集 二二  
(二・三・二)

韓国人と中国人日本語習者による音象徴語の意味理解

飯田香織

小出記念日本語教育研究会論文集 二二  
(二・三・二)

特殊モーラ知覚に対する重音節位置とアクセントによる影響 — 英語母語話者を対象に —

石澤徹

國學院大学 國學院雑誌 一一四・二  
(一・三・一)

京都女子大学蔵谷山文庫本『古今涇渭鈔』の声点一隅

西崎亨

國學院大学 國學院雑誌 一一四・六  
(一・三・一)

節用文字の同音字注

二戸麻砂彦

国際日本語普及協会 AALIT 36  
(一・三・〇)

声とは、言葉とは、何か — 音声研究を通して考える(二)

峯松信明

国立国語研究所論集 五 (一・三・五)

談話論からみた句末音調形式の抽出

沖裕子

静岡大学人文社会科学部社会学科・言語  
化学科研究報告 人文論集 六三・一  
(二・二・七)

特殊拍連続を許容する現代日本語の傾向と近過去からの言語変化について  
— 『常用漢字表』・『新選国語辞典』と『邦訳日葡辞書索引』における二字漢語の比較から —

城岡啓二

拓殖大学大学院 言語教育研究科研究年  
報 一三三 (一・三・一〇)

撥音の後のハ行子音の半濁音化と濁音化について  
— 『常用漢字表』・『新選国語辞典』と『邦訳日葡辞書索引』における二字漢語の比較から —

吉川幸修

朝鮮学会 朝鮮学報 一三七 (二・三・四)

言語普遍性に基づく外国語教育・習得研究  
— 朝鮮語と日本語の母音融合現象研究を中心に —

許田昌平

名古屋大学留学生センター 日本語・日  
本文化論集 一九 (二・三・三)

呼吸継続時間と日本語リズムユニット — 日本語母語話者と韓国語ソウル方言を母語とする日本語学習者との比較 —

橋本島慎

日本音声学会 音声研究 一七二・二  
(二・三・八)

機能性構音障害の音韻分析 — 臨床的視点からの考察 —

上田功

日本音声学会 音声研究 一七二・二  
(二・三・八)

日本語における吃的非流暢性の特徴 — 幼児の発話サンプルによる検討 —

坂田善政

弘前大学教育学部紀要 一〇八  
(二・二・一〇)

室町時代における漢字音の清濁 — 『論語』古写本を題材として —

石山裕慈

弘前大学 国語国文学 三四 (一・三・三)

「字音仮名遣い」の現状と提言

石山裕慈

広島大学教育学部国語教育会 国語教育研究 五四 (一三・三)	清原宣賢自筆『日本書紀抄』(後抄本 本文傍訓の声点が反映するアクセントについて)	坂水貴司	九〇
広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 (文化教育開発関連領域) 六一 (二・二二)	韓国人日本語学習者のアクセント生成力の解明に向けて ―知覚・知識・自己モニタ―を中心に―	高橋恵利子	244
広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域) 六一 (二・二二)	親鸞加点点本に呉音声調の年代差は無い	佐々木勇	九六
広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域) 六一 (二・二二)	第二言語としての日本語文の繰り返し音読における文の音韻・意味処理過程 ―単語の音韻符号化の高速性と音声・意味重視指示の視点から―	佐藤智照	249
フェリス女学院大学文学部紀要 四八 (二・三)	パラ言語的要素を含む場面別談話資料と音響音声学的・計量言語学的アプローチ ―首都圏在住女子大学生を対象として―	齋藤孝滋 他四名	*
文教大学文学部紀要 二五二 (二・三)	現代日本語における唇内入声音の促音化について	舘野由香理	254
文教大学文学部紀要 二六一 (二・二九)	現代日本語におけるハ行子音の半濁音化について	舘野由香理	265
文教大学大学院言語文化研究科付属言語文化研究所紀要 言語と文化 二五 (二・三)	ある日本語音声教材の現状を憂う	城生 佰太郎	280
琉球大学留学生センター 留学生教育 一〇 (三・三)	中国雲南方言母語話者による日本語音声の特徴	永野マドセン 山元 淑泰 元乃子	291
三方言			
アクセント史資料研究会 論集 九 (二・二)	首都圏周辺部における新しい音調の受容パターン ―「とびはね音調」と複合語アクセント―	田中 直樹 林 中 直樹	300
阿波学会紀要 五九 (二・二七)	旧三加茂町の方言	仙波 直樹 村田 有香子	307
茨城大学文学部紀要 人文コミュニケーション学 一五 (二・三九)	東日本震災によるつくば市在住避難者の言語生活の変化と方言意識	杉本 妙子	314
愛媛大学文学会 人文学論叢 一五 (二・二二)	方言文化小考 ―伊予弁とその風土―	清水 史	326
愛媛大学文学会 人文学論叢 一五 (二・二二)	言語意識に関する研究 ―愛媛県の高校生を中心に―	田中 千晶	331
大阪大学大学院 阪大社会言語学研究ノ 一〇 (二・二二)	若年層の命令形の使用範囲 ―栗東市方言・福岡市方言・湖西市方言の対照から―	森村 雄太 平塚 光亮	336
大阪大学大学院 阪大社会言語学研究ノ 一〇 (二・二二)	兵庫県神戸市方言における命令表現	酒井 雅史	345
大阪大学大学院 阪大社会言語学研究ノ 一〇 (二・二二)	福岡市方言の文末詞モン	平塚 雄亮	351
大阪大学大学院 阪大社会言語学研究ノ 一〇 (二・二二)	大阪方言における「イ」の機能 ―文末詞「ワイ」「カイ」の意味にもとづいて―	野間 純平	354
大阪大学大学院 阪大社会言語学研究ノ 一〇 (二・二二)	大阪方言のとりたて形式カテについて	高木 千恵	360
大阪大学大学院 阪大社会言語学研究ノ 一〇 (二・二二)	山形市方言の文末詞ヤ ―ヨと対比して―	渋谷 勝己	366

大阪大学大学院 阪大社会言語学研究ノ ート 一一 (一三・一三)	高知県四万十市西土佐におけるスタイル切換え —フォリナー・トークの観点から—	カーター 白坂千巴拉 韓娥凜里	372
大阪大学大学院 阪大社会言語学研究ノ ート 一一 (一三・一三)	和歌山市方言における疑問詞疑問文の文末詞「ナ」	山口華奈	379
大阪大学大学院文学研究科 待兼山論叢 四六 日本学篇 (一一・一一)	滋賀県長浜市における待遇表現の記述 —日本語 諸方言の待遇表現記述にむけて—	酒井雅史	384
沖縄外国文学会 Southern Review 27 (一・一一)	他地域出身者の「気がつきにくい方言」使用にか んする一考察 —沖縄地域の「じわけ」の使用意 識調査から—	副島健作	392
沖縄外国文学会 Southern Review 27 (一・一一)	宮古口の音韻構造と正書法について	下地良男	398
京都大学文学部国語学国文学研究室 国 語国文 八二 (一一・一一)	レザノフ「公話」からみた一八世紀末石巻方言の マスとマスル	江口泰生	406
京都西山短期大学 西山学苑研究紀要 七 (一一・一一)	「サ詠嘆法」の研究史とその問題点 —文法的特 質に着目して—	濱中誠	412
皇学館大学人文学会 皇学館論叢 四六 (一一・一一)	熊野市域の言語研究 —「ライ」について—	松田麻希	100
甲南女子大学研究紀要 文学・文化編 四八 (一一・一一)	富山県五箇山地方樺地区老年層方言の動詞派生接 尾辞 <i>-jar-</i>	黒木邦彦	422
国立国語研究所 国語研プロジェクトレ ビュー 四二 (一一・一一)	言語変化は経年調査データから予測可能か？	横山詔一	426
国立国語研究所 国語研プロジェクトレ ビュー 四二 (一一・一一)	『日本語地図』のデータベース化が開く新たな 研究	熊谷康雄	432
国立国語研究所 国語研プロジェクトレ ビュー 四二 (一一・一一)	地域語の観点からみた首都圏の言語の実態と動向 の側面	三井はるみ	437
国立国語研究所論集 三 (一一・一一)	Parental Influence on Dialect Acquisition: The Case of the Tone System of Kagoshima Japanese	TAKEMURA Akiko	441
国立国語研究所論集 五 (一一・一一)	宮沢賢治と浜田広介の語法に見る方言からの影響	小島聡子	448
国立国語研究所論集 五 (一一・一一)	喜界島方言のアクセント資料(一)	上野善道	456
国立国語研究所論集 六 (一一・一一)	宮古島における三型アクセント体系の発見 —与那覇方言の場合—	松森晶子	473
国立国語研究所論集 六 (一一・一一)	首都圏若年層の言語的地域差を把握するための方 法と実践	鐘水兼貴	486
社会調査協会 社会と調査 九 (一一・一九)	言語研究と数量化理論 —国立国語研究所の鶴岡 言語調査—	阿部貴人	500
上智大学 Sophia Linguistica 60 (一一・一九)	南琉球竹富島の民話と唄	藤原雅子	504
大東文化大学紀要 人文科学 五一 (一一・一九)	琉球古典音楽の詩歌の日・英・西語訳 III-1	篠原茂子	511
津田塾大学言語文化研究所報 二七 (一一・一九)	東北方言における有声化と無声化について	田仲勉	523
東京大学言語学論集 三二 (一一・一九)	津軽方言の推量形式「ビョン」の意味変化に関す る解釈	橋本文子	530
東北大学文学会 文化 七五 (一一・一九)	西日本諸方言におけるアスペクトと形式の意味 —調査法と理論的枠組みの再検討—	大槻知世 津田智史	535

東北大学文学研究科研究年報 六一 (二・三)	方言形成論の到達点と課題 — 方言圏論を核にして —	小林 隆	545
徳島大学 言語文化研究 一九 (二・三)	日本における方言研究の動向と展望	李相 隆 瀧口 信介 岸江 有香子	564
徳島大学 言語文化研究 二二 (二・三)	淡路島の方言語彙に関する研究 — じゃがいも・さつまいも・さといも —	嶋 信介	578
徳島大学国語国文学 二五 (二・三)	京ことばにおける待遇表現に関する研究 — 存在表現の世代差を中心に —	国 泉	588
徳島大学国語国文学 二五 (二・三)	徳島県旧東祖谷山村のアクセント	村 田 真実	594
徳島大学国語国文学 二五 (二・三)	徳島県の言語調査報告 — アスペクトとあいさつ表現 —	中津 西 太智郎	602
日本語学研究所と資料の会 日本語学 研究と資料 三五 (二・四)	「動詞否定形十終助詞ネ」形式による行為要求表現 — 福岡県筑前・筑後域における使用状況およびその背景 —	笠 万 裕美	619
日本心理学会 心理学研究 八四 — (二・四)	共通語と大阪方言に対する顕在的・潜在的態度の検討	渡 辺 かつら	627
弘前大学教育学部紀要 一〇九 (二・三)	自閉症スペクトラム障害児・者の方言不使用についての理論的検討	松 本 敏治 菊 地 一秀 崎 原 文樹	631
弘前学院大学国語国文学会 弘学大語文 三九 (二・三)	津軽弁わらべ歌 ～ 明治期黒石市の方言により～	笹 森 建 英	二〇九
広島大学日本語教育研究 一三 (二・三)	奄美大島龍郷町浦方言の敬語形式の運用法 — 人間関係の差異に着目して —	重 野 裕 美	635
姫路獨協大学大学院 日本語教育論集 二二 (二・三)	富山方言談話における「アンタ」の機能 — 自然談話における使用実態より —	苗 田 敏 美	639
フェリス学院大学国文学会 玉藻 四七 (二・三)	日本語方言における「南北方言分布」(語彙音韻文法)の特徴	安 部 清 哉	643
フェリス学院大学国文学会 玉藻 四七 (二・三)	首都圏在住女子大学生における場面別母音体系の音響音声学考察(一)	齋 藤 孝 滋 他三名	*
福岡大学人文論叢 四四・三 (二・二)	福岡県における不快感を表す形容語 — 大学生の実態 —	山 県 浩	*
福岡教育大学紀要 第一分冊 文科編 六二 (二・三)	依頼の場面の談話分析 — 大分県方言談話資料による —	杉 村 孝 夫	650
文献探究の会 文献探究 五 — (二・三)	福岡方言のとりたて詞「ヤラ」「ゲナ」の成立をめぐって	松 尾 弘 徳	661
北方言語ネットワーク 北方言語研究 三 (二・三)	八重山語波照間方言の分詞 — 単独形式と接語が付加した形式の機能 —	麻 生 玲 子	667
横浜国大言語教育研究 三八 (二・三)	「超神ネイガー」の方言 ～ 変容する方言・再発見される方言 ～	小 野 寺 泰 子	674
立命館大学日本文学会 論究日本文学 九六 (二・五)	近世中頃の中国地方山間部における格助詞ノとガの用法 — 「石見方言茶話」「田植歌」の考察から —	彦 坂 佳 宣	二二三
琉球大学 言語文化論叢 九 (二・三)	ウチナーヤマトウグチ助詞「カラ」の研究	座 安 浩 史	680
琉球大学国際沖縄研究所 International Journal of Okinawan Studies (IJOs) 4-1 (二・九)	The Central High Vowels in Ryukyuan Languages: A Comparative Palatographic Study of Yuiwan Anami and Tarama Miyako	Hayato, Aoi Yuto Ninaga	686

琉球大学国際沖縄研究所 Journal of Okinawan Studies (I JOS) 4-1 (二二・九)	International Geographical Distribution of Mimetics in Amami-Okinocerabu Island	Akiko Tokunaga	691
琉球大学国際沖縄研究所 Journal of Okinawan Studies (I JOS) 4-1 (二二・九)	The Representative, Negative, Past, and Continuative Forms of Miyako Verbs	Shigehisa Kamata	699
琉球大学国際沖縄研究所 Journal of Okinawan Studies (I JOS) 4-1 (二二・九)	Amami Nominalizations	Masayoshi Shitani Hiromi Shigeno	712
琉球大学法文学部紀要 集 一八 (二二・二)	日本東洋文化論 沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語	かりまた つとむね	729

\* ……論説資料のページ数の制約により、掲載できなかった長大な論文



第五分冊 (コミュニケーション・言語学・対照研究)

一 コミュニケーション

いわき明星大学人文学部研究紀要 二五 (二・二二)	非常時における言葉の人への効力 — 東日本大震災をめぐって —	大橋 純一	1
桜美林大学大学院言語教育研究科 言語教育研究 三 (三・三三)	職場での日本語のインタラクティブな関係者が感じるストレスとその軽減行動	鄭 圭弼	8
大分大学国際教育センター年報 (二・二二)	「師弟関係」と「長幼関係」における敬語の民主化	カイザー・シャーラ	14
大阪大学大学院文学研究科 待兼山論叢 四七 日本学篇 (一・三・二二)	マルチメディア・コーパスと言語行動研究 — 先行研究との比較を中心に —	孫 栄爽	25
金沢大学経済学類 論文集 二〇二二年 度社会言語学演習研究論集 八 (二・三二)	交通標識の日独比較のために	西嶋 義憲	34
関西外国語大学留学生別科日本語教育論集 二二 (二・二二)	終助詞「ね」「よ」「よね」の発話連鎖効力に関する一考察 — 談話完成タスク結果を基に —	西郷 英樹	38
関西学院大学言語教育センター 言語と文化 一五 (二・二二)	Politeness as Role-Identity — Application of Symbolic Interactionism —	Yasuko OBANA	49
京都外国語大学 無差 一九 (二・二二)	テレビ会議場面における日本語母語話者の言語行動 — インターネットを使った日韓交流学習を事例として —	大谷 つかさ 田野岡 幸 岸 磨貴子	57
京都産業大学論集 人文科学系列 四五 (二・二二)	中国帰国者のアイデンティティ	大栗 真佐美	68
久留米大学外国語教育研究所紀要 一九 (二・二二)	敬卑待遇コミュニケーションs 人称の自由論理	島村 賢一	77
神戸松蔭女子学院大学 Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin (TALKS) 15 (二・二二)	終助詞「と」「つけ」の機能 — 「と」「つけ」で表現される私的領域内情報と目に見えない聞き手 —	池谷 知子	84
国立国語研究所 国語研プロジェクトレビュー 四一 (二・二二)	方言ロールプレイ会話におけるコミュニケーション機能について	井上 文子	92
埼玉大学紀要 教養学部 四八 (二・二二)	ファイラーとしての「ちよつと」について	小出 慶一	97
埼玉大学 国際交流センター紀要 六 (二・二二)	Ortegaによる二人称(代)名詞の考察について	金井 勇人	104
社会言語科学会 社会言語科学 一四二 (二・二二)	多層的相互行為としての「ボーンナス・クエスチョン」 — 教室におけるメタ語用的言語使用という視点から —	榎本 剛士	108
社会言語科学会 社会言語科学 一五二 (二・二二)	多言語社会における日本人の言語使用 — スペイン・カタルーニャ自治州在住の日本人のケース —	福田 牧子	115
昭和女子大学近代文化研究所 学苑 八六四 (二・二二)	広告の表現について(二) — テレビコマーシャルにおける業種と表現形式を中心に —	嶺田 明世 長澤 輝世	125
人文科教育学会 人文科教育研究 四〇 (二・二二)	話し合いにおける視覚情報化の学生ごとの特徴 — テキストマイニングによる小学生・中学生・大学生の分析 —	長田 友紀	130
成城大学文学部 成城文芸 二二四 (二・二二)	嘆きか願いか疑いか — 辞苑閑話・二 —	工藤 力男	—

清泉女子大学紀要 六〇 (二二・二二)	Roles in Interaction and Backchanneling Behavior: some differences between two casual interviews	TANAKA Noriko	136
待遇コミュニケーション学会 待遇コミュニケーション研究 一〇 (二二・二二)	「敬意コミュニケーション」の提唱 — 待遇コミュニケーションの可能性として —	蒲谷 宏	150
待遇コミュニケーション学会 待遇コミュニケーション研究 一〇 (二二・二二)	敬語コミュニケーションの基本的な考え方	坂本 恵	158
待遇コミュニケーション学会 待遇コミュニケーション研究 一〇 (二二・二二)	Eメールにおける文字種を選択 — 非標準的な表記の背後に働く語用論的要素 —	増地 ひとみ	167
待遇コミュニケーション学会 待遇コミュニケーション研究 一〇 (二二・二二)	「行動展開表現」におけるメタ言語表現の役割	李 婷	175
待遇コミュニケーション学会 待遇コミュニケーション研究 一〇 (二二・二二)	創設五周年記念大会(二〇二二年度秋季大会)シンポジウム記録 待遇コミュニケーションの可能性	伊藤 由希子 蒲谷 他二名	184
大東文化大学紀要 人文科学 五一 (二二・二二)	語用論的逸脱は聴覚N400を惹起させるか?	富盛 純一 福越 貴弘 桐越 舞	194
筑波応用言語学研究 一九 (二二・二二)	物語の開始部における会話参加者の相互行為	李 孝 謹	200
東海大学紀要 国際教育センター 二 (二二・二二)	言語管理理論における管理プロセス再考 — 規範の動態性・管理プロセスの循環性と非共有性及びミクロとマクロの往還 —	加藤 好 崇	206
東北大学文学会 文化 七六・三・四 (二二・二二)	接触場面における「直接話題転換方略」に関する一考察 — 初対面場面の会話を維持するために —	・エミ・インダー 梅木 俊 輔	215
東北大学大学院文学研究科言語科学専攻 言語科学論集 一七 (二二・二二)	感動詞への「と」の付加をめぐる語用論的意味に関する覚書	清 水 勇 吉 岸 江 信 介 石 田 基 吉	227
徳島大学 言語文化研究 一九 (二二・二二)	依頼に対する断り表現について	清 水 勇 吉	235
徳島大学国語国文学 二五 (二二・二二)	テキストマイニングによる文書分析 — 内閣総理大臣の所信表明演説を元に —	董 艶 秋 嶋 口 有 香 子	240
徳島大学国語国文学 二五 (二二・二二)	外国人に対する防災意識アンケート調査の分析 — 多言語景観研究・多言語表示研究の一環として —	宮 本 淳 子	251
常葉学園短期大学紀要 四三 (二二・二二)	二者間の会話における時間軸移動によるテーマ展開について — ラジオパーソナリティとリスナーとの会話をとらえ —	安 井 永 子	262
名古屋大学文学部研究論集 文学 五八 (二二・二二)	接続詞「でも」の会話分析研究 — 悩みの語りに対する理解・共感の提示において —	小 林 敬 一	269
日本教育心理学会 教育心理学研究 六〇・二 (二二・二二)	大学生による書かれた論争への参加 — テキスト間関係の理解が果たす役割 —	高 橋 麻 衣 子	275
日本教育心理学会 教育心理学研究 六二・一 (二二・二二)	人はなぜ音読をするのか — 読み能力の発達における音読の役割 —	陳 剛 力	284
日本語文化研究会 日本語文化研究 一八 (二二・二二)	制度的状況の会話分析に基づくマスメディア相互行為の考察	趙 剛 力	284
日本コミュニケーション学会 ヒューマン・コミュニケーション研究 四一 (二二・二二)	会話と活動の関係から見る会話終結 — 日常追跡法による大学生の会話を中心に —	居 關 友 里 子	293
日本語/日本語教育研究会 日本語/日本語教育研究 四 (二二・二二)	「やさしい日本語」使用の可能性と課題点 — 幼稚園の事例研究を通して —	西 尾 広 美	293
日本社会学会 社会学評論 六二・四 (二二・二二)	会話における親アイデンティティ — 子どもについて — の知識をめぐる行為の連鎖 —	戸 江 哲 理	302

日本大学国文学会 (二二・〇)	語文 一四三	若年層の断りの表現 — 携帯メール文体分析の観点から—	齊木春香	311
日本大学国文学会 (二二・〇)	語文 一四六	漫才の構成要素と「笑い」の相関性 — ボケ・ツッコミ・表情・フリなど—	廣瀬義人	318
日本大学国文学会 (二二・一二)	語文 一四七	役割語研究の一〇年 — 日本大学国文学会講演記録—	金水敏	323
日本女子大学大学院文学研究科紀要 一八 (二二・三)	通訳翻訳研究 一一	母語話者はどのように語るのか — 日英語ナラティブにおける語り手の視点—	川副理美	333
日本通訳翻訳学会 (二二・一二)	通訳翻訳研究 一一	身体としてのことば — 「スタイル」の限界—	定延利之	340
日本通訳翻訳学会 (二二・一二)	通訳翻訳研究 一二	法廷通訳と言語イデオロギ—	吉田理加	353
日本通訳翻訳学会 (二二・一二)	通訳翻訳研究 一二	日本の司法通訳研究の流れ — 方法論を中心に—	水野真木子 他三名	363
日本通訳翻訳学会 (二二・一二)	通訳翻訳研究 一三	女ことばと翻訳 — 理想の女らしさへの文化内翻訳—	古川弘子	374
日本比較文化学会 一〇一 (二二・三)	比較文化研究	日本人にとってのアドヴァイス・ボライトネス・ストラテジーの観点から	八尾紀子	386
日本比較文化学会 一〇二 (二二・六)	比較文化研究	日本語学習者のインタビューでの発話におけるボーズとファイラーの特徴	高村めぐみ	391
日本比較文化学会 一〇四 (二二・二)	比較文化研究	「丁寧化百分率」から見る接続助詞「が」「けど」類の丁寧さと従属性	丁琳	※※
日本比較文化学会 一〇五 (二二・一)	比較文化研究	発話権取得における【自己主張】キャラクターの表出について	李熙穎	※※
日本歴史言語学会 (二二・一二)	歴史言語学 二	明治時代初期より昭和時代初期における日本指文字群の系譜	末森明夫	397
北海道大学留学生センター紀要 (二二・一二)	一六	若い世代の尊敬語・謙讓語使用意識とジェンダーに関する一考察	延与由美子	415
明治学院大学英米文学・英語学論叢 二二七 (二二・一)	人文科学系列	相互行為における機能的単位について — 発話行為連鎖の視点から—	生田少子	424
横浜国立大学論叢 六三二 (二二・三)	人文科学系列	言語行為としてのインフォームド・コンセント — 「情報開示モデル」から「会話モデル」へ—	石田安実	435
立命館大学大学院言語教育情報研究科 On Language and Language Education 4 (二二・一二)	二	二言語環境における在日中国人児童二名の発話の特徴	馬晶	445
二 言語学				
大阪大学大学院文学研究科 待兼山論叢 文化動態論篇 四六 (二二・二)	四六	BCCWJに収められた新種の言語資料の特性について — データ重複の諸相とコーパス使用上の注意点—	田野村忠温	457
清泉女子大学人文学研究所紀要 (二二・一〇)	三四	ことばのうっわ	今野真二	七
天理大学学報 六四二二 (二二・二)	六四二二	右枝節点繰上げ構文について	岩田良治	470
名古屋大学大学院国際言語文化研究科 言語文化論集 三四一 (二二・二〇)	三四一	言語の起源・自分自身との対話としての思考 — 人工生命の観点から—	外池俊幸	※※
日本エドワード・サピア協会研究年報 二七 (二二・三)	二七	文化語彙の翻訳はどこまで可能か? — 『坊っちゃん』とその英訳を資料として—	霜崎實	478

日本心理学会 心理学研究 八二六 (二・二)	日本語版リーディングスパンテストにおける方略利用の個人差	遠藤 香織 芋 満里子	486
日本通訳翻訳学会 通訳翻訳研究 一二 (二・二二)	日本語発話の解釈・CMM理論の日英通訳指導への応用	新崎 隆子 石黒 弓美子	489
日本歴史言語学会 歴史言語学 一 (二・二二)	イネ・コメの比較言語学	松本 克己	498
法と言語学会 法と言語 一 (二二・二六)	起訴状における予断排除の原則を言語学の観点から考える——外遊はもうかりまつせ」名譽毀損事件を題材に——	首藤 佐智子 池邊 瑞和	508
明治学院大学教養教育センター紀要 ルチュール 七一 (二二・三)	The syllable is not a universal prosodic unit —A case of Japanese—	Sato, Yasushi	***
<b>三 対照研究</b>			
朝日大学留学生別科紀要 一〇 (二二・二)	産出方法の違いによる形容表現の使用状況——韓国語母語話者と日本語母語話者の比較——	木下 謙朗	514
宇都宮大学国際学部研究論集 三五 (二二・二)	日本語のNQC型数量表現に対応する中国語の数量表現——形式と意味の観点から——	范 喜春	521
海山文化研究所 対照言語学研究 二二 (二二・二二)	日本語の「ちごち」「こご」と中国語の「一」の対照	万 礼	527
海山文化研究所 対照言語学研究 二二 (二二・二二)	特立の取り立ての中日対照研究——「オ」と「ソ」を中心——	李 占軍	533
海山文化研究所 対照言語学研究 二二 (二二・二二)	「だれひとり」「なにひと」と「任何一」に関する対照研究——機能分布の角度から——	賈 黎黎	540
大阪大学 OUPEL, Osaka University Papers in English Linguistics 16 (二二・二)	A QUESTION-ANSWERING SYSTEM IN NEGATIVE QUESTIONS OF ENGLISH, FRENCH AND JAPANESE	RITSUKO KAMEYAMA	545
関西学院大学言語教育研究センター 言語と文化 一五 (二二・二)	日本人と韓国人の言語行動における「ウチ、ソト、ヨン」と「우리、우리」——主に敬語行動を例に——	巖 廷美	562
京都外国語大学・京都外国語短期大学 Cosmica 42 (二二・二)	比喩表現について(一四)——フランスと日本の故事・諺・成句にみられる天候・自然現象の語彙による比喩表現を中心として——	小倉 博史	569
京都外国語大学・言語学論集 一九二 (二二・二二)	オノマトペの伝達上の価値(二)——物語テキストにおける日独語対照——	乙 政 潤	574
熊本学園大学文学・言語学論集 一九二 (二二・二二)	浅析日語中身漢語的漢字同形的形容動詞(原文は簡体字)	李 珊	585
高知大学留学生教育 六 (二二・三)	文法の対照研究と異文化理解	井上 優	592
神戸大学大学院国際文化学研究科 国際 文化学研究 三九 (二二・二)	雑誌記事における翻訳方略——「たとえのイメージ」(例え・譬え・比較)をどう訳すか——	藤 濤 文子	608
神戸外大論叢 六二四 (二二・二二)	Discrepancias en las categorías léxicas del japonés y el español	Juan Romero Díaz	617
国立国語研究所論集 二 (二二・二)	モノノとナイマデモノ：節連接の五つのレベルにおける逆接と譲歩条件	角田 三枝	627
国立国語研究所論集 三 (二二・二五)	節連接表現の中のモタリテイ	角田 三枝	641
実践女子大学人間社会学部紀要 八 (二二・二)	対称詞の待遇性による使用制限——日本語・朝鮮語・中国語の社会言語学的対照の観点から——	高木 善裕 宋 善花子	650

社会言語科学会 社会言語科学 一六一 (二・三・九)	診療コミュニケーションにおける非対称性 —日米比較—	大瀧 祥子	658
昭和女子大学近代文化研究所 学苑 八七一 (二・三・五)	日韓母語話者と韓国人日本語学習者の(事態把握) —シナリオ作成法調査の結果から—	徐 珉廷	666
拓殖大学大学院 言語教育研究科研究年 報 一三三 (二・三・二)	世界中の授受表現について —語彙体系を中心に—	鄭 光峰	674
朝鮮学会 朝鮮学報 一三四 (二・二・七)	可能形式「할 수 있다/없다」の用法について —(ち)からの可能と(蓋然性)の可能—	高 恩淑	681
東北大学文学会 文化 七六一・二 (二・二・九)	ト条件文の日中対照実証的研究	李 北光 張 林赫	695
名古屋大学大学院 言語文化論集 三四二 (二・三・二)	「여기」と「이곳」の類義語分析 —「ここ」と比較 して—	李 澤熊	703
南山大学大学院 南山言語科学 七 (二・二・二)	日・英語の受動構造 —Bowers(2010)の提案を 基に—	足立 季美佳	709
日中言語研究と日本語教育研究会 日中 言語研究と日本語教育 五 (二・二・二〇)	日中韓漢字語研究序説 —「恋愛」・「生活」・「運 命」をめくって—	中 川 正之 楊 英虹 朴 清秀	717
日中言語研究と日本語教育研究会 日中 言語研究と日本語教育 六 (二・三・二〇)	知ルと“知道”	荒 川 麟声	721
日中対照言語学会 日中言語対照研究論 集 一五 (二・三・五)	再び「V来 V去」と「Vてくる、Vていく」に ついて	張 麟声	727
日中対照言語学会 日中言語対照研究論 集 一五 (二・三・五)	日中両言語における使役のむすびつき	高橋 弥守彦	733
日中対照言語学会 日中言語対照研究論 集 一五 (二・三・五)	試論「ミル」和“看kan”在時間結構上の差異 (原文は簡体字)	王 学群	743
日中対照言語学会 日中言語対照研究論 集 一五 (二・三・五)	日本語と中国語の指示詞の対照研究 —「コンナ 類と「コウイウ」類」这种“類と”这样的“類 を例に—	杉 山 さやか 劉 山 巖	753
日本大学文学部人文科学研究所 研究 紀要 八六 (二・三・九)	日語「助数詞」与漢語“量詞”的關係及使用特 征 (原文は簡体字)	張 麗群	761
日本比較文化学会 比較文化研究 一〇二 (二・二・六)	日韓大学生の対人行動に関する比較研究 —他者 に対する言語行動に見られる文化的差異—	横 山 由香	768
日本比較文化学会 比較文化研究 一〇六 (二・三・三)	日本語とシンハラ語の授受補助動詞の対照比較	R・M・サンデ リアブリヤダ ルシヤニ	777
日本比較文化学会 比較文化研究 一〇七 (二・三・六)	日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句の比較 研究 —モンゴル語の所有接合語「H」を中心 に—	スレンジャブ オユンズル	777
日本文芸研究会 文芸研究 —文芸・言語 ・思想— 一七四 (二・二・九)	日本語の必須条件形式について —中国語との相 違を手がかりに—	李 光赫 孟 慶榮	775
東アジア日本語教育・日本文化研究学会 東アジア日本語教育・日本文化研究 一六 (二・三・二)	日本語と中国語の再帰代名詞について —意味と 用法を中心に—	金 晶	780
東アジア日本語教育・日本文化研究学会 東アジア日本語教育・日本文化研究 一六 (二・三・二)	日中広告言葉における対照研究 —シンタックス を中心に—	趙 嵐	790
東アジア日本語教育・日本文化研究学会 東アジア日本語教育・日本文化研究 一六 (二・三・二)	日台両国のあいさつ言語行動の対照研究 —校内 での出会いの場面を中心に—	劉 静慧	805

北方言語ネットワーク 北方言語研究 三 (一三・三)	対照言語学的観点からみた相対テンスについて ―日本語及びアルタイ諸言語における形動詞を用 いた従属節の分析―	風間 伸次郎	814
宮城学院女子大学研究論文集 二二四 (二二・二)	「かわいい」に対応する韓国語の語彙	張 錫 環	827
立命館大学大学院 On Language and Language Education 4 (一一・三)	日本語の事態把握の研究 ―日・韓・英の対照よ り―	金 慧 源	834

\* …… 特集号・専門誌などに掲載されたために紹介にとどめた論文

\*\* …… 著作権者と連絡がとれなかったため紹介にとどめた論文

日本語学論説資料 第50号

## 収録論文一覧

2015年 9月30日発行

協力 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
国立国語研究所

発行 論説資料保存会  
代表者 常盤浩行

〒173-0036  
東京都板橋区向原3-10-2 (株)北辰内

日本語学論説資料 第50号 発行日

第1分冊	2015年 9月30日
第2分冊	2015年 9月30日
第3分冊	2015年 9月30日
第4分冊	2015年 9月30日
第5分冊	2015年 9月30日